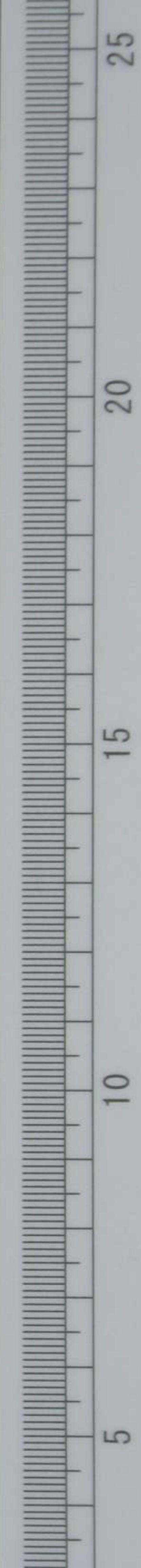




有島武郎譯
 亦井トマシ
 詩集
 第二輯



ホヱツトマン詩集(必)有島武良譯

叢文閣刊行

叢文閣刊行

ホヰットマン詩集(有島武郎譯)

有島武郎譯
ホヰットマン詩集

第二輯

Biographical

Walter Mottman

1819

Born at West Hill

New York - second of
Gen. Sam. Nelson's
family at West Hill

1824

Moved to Brooklyn
1831, tended in lawyer's office.

In 1834 went into printing office
setting.

1838

Teaching in ...

集詩
澤所
輯
半島
有
不
業

State of
Louisiana

Pa.

Paper
林林林林林林林林林林林林林林
County
County

林林林林林林林林林林林林林林

2

The Study of the Chinese Language in the United States

1840
Back in New York City working at printing and journal work writing. In 1846 and '7 edit the "Eagle" newspaper in Brooklyn.

1848

Goes to the staff of "The Globe" travels south and south west.

義文閣

an editor on the was afterward

1850

Returns north. Publishes "the Freeman" news paper in Brooklyn. Then works with Cuddeback's house and edits them

1855-1856

"Leaves of Grass" first Edition. 10 pages

1856 2nd edition 10 ms. 3rd edition 1860

Belong to



Calamus adspersus Bl.
to
"scented herbage
of my breast"
W. W.

文
80/108
書

Handwritten signature

木井ツトマン詩集 第二輯

有島 武郎 譯

一九二一年

叢文閣刊行

譯者小序

○この譯詩集の第二卷を公けにすることのかく遅れたのは譯者の怠慢に依るものである。

○「牢獄の歌ひ手」を除く大部分の詩は

“Leaves of Grass”, issued under the editorial supervision of his literary ex-
cutors, Doubleday, Page & Co., N. Y.

に據つた。「自己を歌ふ」中に數箇所未定稿となすべきものがある。若し讀過の際誤謬に氣附かれる方があつて、是正を惜しまれなかつたら難有く思ふ。

○譯詩の或るものは既に他の雜誌に掲載した。

○「ワルト・ホキットマン」といふ小さな感想は私の贅語に過ぎない。詩人を歪んで見てゐるかも知れない。そのつもりで讀んでいただきたい。

一九二二、一月八日曇りて雨ならんとする夜半

譯

者

目次

自己を歌ふ	Song of Myself (1855)	三二
嚴かにもやさしいオルガンのパイプよ私はお前の聲を聞いた	I heard you, Solomn-Sweet Pipe of the Organ (1855—56)	三九六
この合肥	This Compost (1856)	三九九
おもひ	Thought (1856)	四〇五
美女	Beautiful Women (1860)	四〇六
今、生の盛りに	Fall of Life now (1860)	四〇九
屢、ひそやかに私の近づくあなたよ	O you whom I often and silently come (1860)	四〇九
時たま私の愛するものに對して	Sometimes with One I love (1860)	四一〇

私に似た大地 Earth: My Likeness (1860) 四二一

博名を知り得た時 When I peruse the conquer'd Fame (1860) 四二二

私達二人は相寄りながら We two Boys together clinging (1860) 四二三

私は愛慾に悶えるその人だ I am He that aches with Love (1860) 四二五

女の歌手に To a certain Cantatrice (1860) 四二六

一人の弟子に To a Pupil (1860) 四二七

臨終の人に To One shortly to die (1860) 四二九

母と嬰子 Mother and Babe (1865) 四三三

走者 Runner (1867) 四三三

忍耐強いしづかな蜘蛛 A noiseless, patient Spider (1870) 四三四

牢獄の歌ひ手 The Singer in the Prison (1870) 四三六

ワルト・ホキットマン (感想) 四三五

ホキットマン詩集 (2)

装 幀

彫 刀
刷 及

有 島 武 郎

伊 上 凡 骨

自己を歌ふ

—

私は今自己を披露し、自己を歌ふ、

而して、私の衣はまたあなたの衣であるだらう、

何故といつて、私に属する凡ての原子は、等しくあなたにも属するのだから、

さまよひがてらに私は私の魂を誘ひ出す、

夏草の穂を眺めながら、欲するがまゝに私は倚りかゝり、又はさまよひ歩く。

私の言葉、私の血のあらゆるしたより、それはこの大地と大空とから造られた、こゝに私は両親から生れ、両親は更らに両親から生れ、その両親は又更らに両親から生れ、

完全な健康にあつて、今三十七歳なる私は始める、死に至るまで不休であらんことを望みながら。

教義と流派とを無視し、

そのあるがまゝに任せて、而かもそれを忘れることなく、暫らくそれらから退き、私は善悪にかゝはらず自己に即する、而して思ふがまゝに物を言はう、本然のエネルギーによる無拘束の自然。

家々も部屋々々も香料に満ち、棚の凡ても香料にあふれてゐる、私はその薫りをかぎ、それを知り、又それを好む、そのしたよりもまた私を酔はさうとするが、私はさうはさせまい。

大氣は香料でもなく、そのしたよりの味ひもなく、全く香ひがない、それは永久に私の口に適し、私はそれを熱愛する、

私は森のわきの土堤に行つて、装ひを解き眞裸かになるだらう、私は大氣と觸れ合ふ時頂天になる。

私自身の呼氣のけむり、

反響、さよめき、ひそやかな囁き、(女萎、馬利筋、木の又と這ひ蔓)、

私の呼吸、心臓の鼓動、私の肺に流動する血と空気、
 緑り葉と枯れ葉との香ひ、又汀と暗色なる海礁の、又收穫小屋なる牧草の香ひ、
 風のまに／＼たゞよひ去る私の大聲の言葉の響き、そこばくの軽い接吻、そこばくの
 抱擁、腕のかき抱き、

みづ／＼しい枝のたわむ時、樹木に現はれる影と光との戯れ、

孤獨のよろこび、群衆にもまれるよろこび、或は野の上、岡のすそのよろこび、

健康の感じ、眞晝の小歌、寢床を出て太陽を迎へる時の私の歌。

あなたは千エーカーを大したものと思ふか？ 地球そのものを大したものと思ふか？
 読書家とならう爲めにあなたは永年努力したといふのか？

あなたは詩歌の本義に通ずることに誇りを感じてゐるといふのか？

今日而して今夜、私と一緒にゐなさい、さうしたら、あなたは凡ての詩歌の源を自分
 のものになし得るだらう、

あなたは地球と太陽との精髓を自分のものになし得るだらう（しかもそこには幾十萬
 の太陽がまだ残されてゐる）、

あなたは最早物事を人傳てに受取るやうなことはしなくなるだらう、或は死んだ人の
 眼を通じて物を見たり、書物の中の幻影で自分を養ふやうなことはしなくなるだら
 う、

あなたはまた私の眼を通じて物を見たり、私の手からそれを受け取るやうなこともし
 まい、

あなたは自ら四方に耳傾け、あなた自身から物事を濾し取るだらう。

私は人がいやさきといやはてとの物語をするのを聞いたが、
私はいやさきやいやはての話はしない。

今にまさつた發端はどこにもありはしない。

今よりも若きもの、今よりも老いたるものは何處にもありはしない。

今に優つて完全なものは將來にも來ないだらう。

今の外には天國も地獄もありはしない。

促進、而して促進、而して又促進、

常住に創造しつゝゆく世界の促進、

未分の中から等位が對立して進み出る、常に實質と増進、常に陰陽、

常に縫着せる同似——常に特殊——常に繁榮する生命。

それをくだくしく説く必要はない——有智も無智も等しくその事實を感じてゐる。

最も確實なものゝ如くに確實に、(垂直に屹立し、しつかりと繋ぎ合はされ、梁に括ら
れた柱のやうに)

又は感高く、生氣に満ちた馬のやうに健やかに、私とこの神秘とは、手をつなぎ合せ
て、こゝに、立つ。

汚れなく香はしいのは私の魂だ、而して汚れなく香はしいのは私の魂ならざる凡ての
ものだ。

一つを缺く時兩方は缺ける、而して見えざるものは見ゆるものによつて證明される、見ゆるものがまたやがては見えざるものとなり、證明を受ける番にまはるまで。

最上のものを現はし、それを最悪なものから切り放ちながら、時代から時代は苦しむ、けれども私は、事物の完全な順應と均衡とを知るが故に、人のあげつらふ時私は黙す、而して水に浴しながら自分自身を嘆美する。

私に屬する凡ての機關と機能とを私は歓迎する、而して汚れなく真心ある凡ての人のそれを、

そのいさゝかも、そのいさゝかのその又いさゝかも蔑げすむべきではない、而して如

何なる部分も同様に私には親しまし。

私は満ち足つてゐる——私は見、踊り、笑ひ、且つ歌ふ。かぢりついてまで愛してくれるものが、夜もすがら私の床に添ひ寝して、夜のひきあけに登音を盗んで去り行く時、

家中に満ち溢れる程、白い手拭で蔽はれた籃を残してゆく時、

私は私が入れること及び實現することを延引して自分の眼を疑ふだらうか、

私の眼が道路の上を遠く見送り、

而して見極めたところを細かく私に示し、

一人だけの確實な値打ちと二人の確實な値打ちとを示し、その兩者のいづれが勝るかを示した時に。

四

散歩するもの、質問する者達が私を取り圍む、

私の會ひ得た人々、若い頃の生活、私の住つてゐた町、都市、或は國の私に與へた感
化、

最近の日々、發見、發明、會合、古き、新しき著者、

私の食事、衣服、交遊、風體、挨拶、負債、

私の愛する男又は女のほんとうの又は見せかけの無關心、

私の家族の一人又は私自身の病氣、又は悪行、又は持ち金の消失と缺乏、又は悒鬱、

又は得意、

戦争、兄弟相喰むいま／＼しさ、はつきりしない報道の不安、節々の出來事、

これらのもの凡ては夜となく晝となく私に来て、又私から離れ去る、
けれども凡ては「私」そのものではない。

それらの押し寄せまきかへすものから離れて私といふものは立つてゐる、

面白がつて、落付いて、憐れみながら、手をつかねて、取亂さずに立つてゐる、

見おろし、直立し、或は或る觸れがたい倚りものに腕を頼み、

横に頭をねぢまげて眺めながら、物珍らしげに次ぎに起るものを待つ、

勝負の中に又はその後何が始まるかを期待もて見守つてゐる。

自分の生涯の過去に、私が語學者や論争者と霧の中を藻がき進んだ頃を回顧する、
私は嘲弄も議論もしない、私は目撃しつゝ待つ。

五

私はお前に信頼する、私の魂よ、魂でない私の他の部分もお前に對して自卑するやうな
 なことではならない、

而してお前も他に對して自卑するやうなことではならない。

私と共に草の上を道へ——お前の喉から栓を取り除け、

私の求めるのは、言葉でも、音楽でも、韻律でもない、愛顧でもなければ小言でもな
 い、——たとへ、それが最上のものであつたとて、

私の望むのは、なだめのみだ、押ししづめたお前の聲のさゝやきのみだ。

思ひ出す、澄み互つた或る夏の朝に、二人が臥ころんでゐた時、

お前は頭を横すじかひに私の腰のあたりに置いて、

徐ろにそれを私の體の上で動かし、

私の肋骨から被ひ物を取除き、むき出しになつた私の心臓にお前の舌をさし入れ、

更らにお前は私の鬚に觸れ、遂に私の足を抱いたね。

その時忽ち私のまはりには平和と智慧とが擴がつたが、それは地上の凡ての技巧と論
 議とを超越してゐた、

而して神の手は私自身の約束であることを知り、

而して神の靈は私自身の兄弟であることを知り、

而して凡そこの世に生れた凡ての男は私の兄弟、凡ての女は私の姉妹であり戀人であ

り、

而して萬有の土臺骨は愛であり、

而して野にあつて、且つ榮へ且つ萎む草葉は限りもなく、

而して草蔭の小さな巢に住む赤蟻、

而して蝕れた垣の藓かさまたの痂かさ、盛り石、接骨木くわつこ、毛蕊花、山午莠も亦限りないことを知つた。

六

一人のをさな子が草を手一杯持つて来て、「これは何んだ」といつた。

私は如何してそののをさな子に答へることが出来よう？ をさな子が知らないと同様に、私も知つてはゐないのだから。

思ふにそれは、繁りゆく草葉で織りなされた、私の性情を現はす旗印だらうか。

或は思ふにそれは神のハンケチなのだ、

香ひ高き記念の贈物として、わざと神の手から落されたのだ、

その隅の一つには持主の名が記してある、

それを見付けた私達が、誰れのものだといひあてられるやうに。

或は思ふに、草は草自身が一人のをさな子だ、植物の世界に生れ出た乳のみ子だ。

或は思ふに、それは誰れにでも通じる形象文字で、

熱帯にも寒帯にも同じく萌え出で、
白人の間にも黒人の間にも成長し、
カヌック、チュカホー、議員、奴隸、そのいづれにも私は等しく與へ、そのいづれから
も私は等しく受け取る。

更らに又それは、刈られずに生ひ茂る、墓場の美しい鬚とも見える、

大事にかけて私はお前を手に觸れよう、巻きくねつた草の葉よ、
事によると、お前は若い男達の胸から萌え出で、來たのかも知れない、
若しその男達を知ることが出來たら、私は彼等を愛したらう、
事によると、お前は老いたる人々から來たのかも知れない、或は、生れると間もなく、

母の膝から取り去られた乳のみ子から來たのかも知れない、
而してそれはまた母の膝でもある。

この草は老いたる母達の白い頭から來たにしては餘りに黒いし、
老いたる男達の色なき鬚にしては黒すみ過ぎてゐる、
薄紅い口蓋から來たにしても黒い。

おゝ、兎も角、私は語られたる數多くの言葉を思ひ知る、
而してそれらが無意味に口蓋から發せられたのではないのを知る。

世を去つた若い男と女についての示唆を解きあかすことが出來たならと私は思ふ、

老いた男と母についての示唆、又生れると間もなく、母の膝から取り去られた乳のみ子達の示唆を。

若き男達と老いた男達とがどうなつたかとあなたは思ふ、
又女達とその子等とはどうなつたかとあなたは思ふ。

彼等は生きてゐる、而して何處かにゐて健かだ、

微細な萌芽も、實際死といふものゝないのを示してゐる、

而して、あつたとしたところが、それは生命を生み出す。而して最後に生命を妨げようとするやうなことはない、

而して生命が出現する瞬間に死は無くなる。

凡てのものは前方に而して外方に進出する、何者も崩れはしない、
而して死とは、假初めに想像されてゐるものとは違つて、遙かに幸福だ。

七

生れるのは幸福だと想像する人があるか？

私は直ちにその人に告げよう、死ぬのも同様に幸福なことだ、而して私はそれを知つてゐる。

私は死者と共に死の門を潜り、産湯をつかつた乳のみ子と共に生の門を潜つた、而して私は自分の帽子と長靴との間だけに包括されてゐるやうな男ではない、
而して私は色々な物象を追求した、一として同じものはない、而してどれもいゝ、

大地もいゝ、星もいゝ、而してそれに屬する凡てがいゝ。

二四〇

私は大地でもなければ、それに屬するものでもない。

私は民衆の友であり伴侶である、彼等も亦私と同じく不滅で神秘だ。

(人は如何に不滅であるかを知らないが、私はそれを知つてゐる)。

凡てはそれ自身の爲めであつて、それ自身のものだ、私の爲めの男であり女である。

私の爲めに、若さを知つた人々、而して女を愛するものを、

私の爲めに、誇り高き男、侮蔑によつていかに傷くかを感じる男を、

私の爲めに、情人と而して老女を、私の爲めに母達を、而して母のまた母達を、

私の爲めに、微笑んだことのある唇を、涙したことのある眼を、

私の爲めに、子供達を、而して子供を生むところの人々を。

衣を脱げ！ お前は私に取つては罪もなく、役立たずでもなく、無視されてもゐない、精巧であらうが、粗末であらうが、其衣物を透して果してどうあるかを私は見極める、而してその周圍に、執念く、倦くことなく、まつはりついて、決して拂ひ捨てられはしないだらう。

八

みどり子が搖籃の中に眠つてゐる、

私はうすものをかゝげ永い間眺めやる、而して靜かに手もて蠅を追ひ拂ふ。

少年と顔赤めたる少女とが、木立の多い岡の上へと歩みをそらす、

二四一

私は頂きから覗いてそれを見てゐる。

自殺者が寢室の血まみれになつた床の上でのたうち廻る、

私は髪ふり亂した屍を目撃する、ピストルが何所に落ちたかに氣をつける。

硝道の饒舌、荷車の車輪、靴底の音、散策者の話聲、

重々しい乗合馬車、拇指を立て、客をすゝめる御者、花崗石の地床の上に鳴る蹄鐵の

音、

雪橇、鈴の音、大聲の冗談、雪合戦、

人氣者に浴せかける歡呼、激昂した暴徒の憤怒、

病院に運ばれる病人を乗せた擔架の被布のひらめき、

仇同志の遭遇、突然の罵詈、打撲と昏倒、

昂奮した群衆、その群衆のたゞ中に進み入らうとする勳章をつけた巡查、

無数の反響を吸ひ入れまた吐き出す無感情の石ころ、

日射病にかゝり或は發作を起して倒れた、食ひ過ぎたもの、或は饑ゑに迫つたもの、

叫び聲の凡て、

急いで家に歸り而して産氣づいた女達の叫び聲のすべて、

或はなほ聞こえ、或は既に聞こえずなつた言葉のかぎり、禮節の爲めに押しひしやげ

られた叫喚のかぎり、

犯罪者の捕縛、嘲弄、色じかけ、その承諾、唇をそらしての拒絶、

私はそれらに氣を配る、或はそれらの幻影と反響とに氣を配る——私はそこに來る、

而してそこを離れ去る。

田舎の收穫小屋の大きな戸は物待ち顔に廣く開かれてゐる、
收穫時の枯れ草はのろ／＼と挽かれる車に積み乗せられてゐる、
透明な光は、灰蔦色と緑とのまじり合つたその上に戯れ、
雙腕に抱へられた草は幾抱へもたわ／＼な草の山に置きそへられる。

私はそこにある、助力する、草の山の上にあつて脊のびする、
私はそれのやはらかく揺れるのを感じた、片方の脚を他の脚の上に休らはせながら、
私は横桁から飛び降りて、首宿とティモシーとを掴む、
而してそこにでんぐりかへり、藁屑と髪の毛とを纏れさす。

唯ひとり、遠く荒野と山岳とに私は狩り暮らす、
自分の身軽さと上機嫌とに驚いてさまよひながら、
夕暮近くになつて、夜を過すべき安全な地點を選び、
火をつくつて新たに殺した獲物を焙り、
獵犬と獵銃とをひきよせて、寄せ集めた木の葉の上で眠りに入る。

米國風の快走船が小さな横帆を張りひろげ、光と飛沫とを散らして走る、
私の眼は陸地を見守り、その船首にかゞまり、或は喜びに満ちて甲板に叫ぶ。

船頭と貝掘りとは早起きして私の所に立寄つてくれた、

私はズボンを長靴にたくしこみ、出かけて行つて愉快に時を過した。
あなたもその日は雞炊鍋の側に来てゐるとよかつたのに。

私は遙かな西方で、野天の下に行はれた獵師の結婚式を見た、花嫁は赤人種の娘だつた。

娘の父と父の友達とは胡座をかい、黙つて煙草をくゆらしながら近くに居列らんだ。彼等はその足に皮鞋をはき、その肩からは大きな厚い毛布を羽織つた。

土堤の上をゆるやかに歩む獵師、彼れは重に皮で身を装ひ、その潤澤な鬚と卷毛とは頸を守り、花嫁をその腕にかき抱いた。

花嫁は長い睫毛を持ち、その頭には被りもなく、癖のない粗い髪毛は、色盛りな肢體を流れて足までもとゞいてゐた。

逃げ出した奴隷が私の家に来て戸外に立停つた。

積み薪の小枝の折れるので彼れの動作を私は聞きつけた、

打開いた臺所の観音開きの戸の隙から私は彼れが弱り果て、よろめくのを見た、

丸太の上に腰かけた彼れの所に行つて私は彼れを家の中に招じ入れた、而して安全を保證した、

而して水を水槽に満たし、汗になつた體と、擦傷を受けた脚を洗はした、
私のに續く部屋を興へ、而して清い荒布の衣物を供した、

而して今でも彼れの眼球の廻旋ときごちなさを思ひ出すことが出来る、
而してその頸と足頸の擦傷に膏藥を張つたのを思ひ出すことが出来る、

彼れが健康を回復して北の方に發足するまでには一週間私のところに滞在した、

食卓では彼れを私の次ぎの座にするた、私の銃は部屋の隅に立てかけてあつた。

一一

二十八人の若者が海岸で水と戯れてゐる。

二十八人の若者、而して凡てが睦まじく、

二十八年の女らしい生涯、而して凡てが物淋しく。

女は岸の高みに美しい家を持つてゐる、

美しい女は、豊かに身を装つて、窓の鎧屏の後ろに隠れてゐる。

どの若者を女が一番好くのだらう、

あゝ、中でも一番氣取らないのが女には美しいのだ。

どこにおいでですか、貴女よ、私はあなたを見てゐますよ、

あなたはあすこの水の中を跳ねまはりながら、而かもあなたの部屋の中にひそんでゐる。

跳りながら、笑ひながら、第二十九人目の游泳者が海沿ひをやつて来る、
他の人々は彼女を見なかつたが、彼女は若者達を見、それを愛してゐる。

若者達の髻は濡れてかゞやき、滴りは又その長い髪をも流れ下つた、
小さな小河がその五體を走り過ぎた。

眼に見えない一つの手も亦彼等の五體を走り過ぎた、
その手は震へながら、彼等の頭から、肋骨から走り過ぎた。

若者達は浮き寝をする、その白き腹部は太陽の方にふくれ上る、彼等は誰れがそれを

しつかりとかき抱くかを尋ねない、

誰れが曲線を描いてしなだれかゝりながら、彼等に口を接し、凭れてゐるかに気がつかない、

彼等は飛沫を以て誰れをひた濡れにしてゐるかを思はない。

二二

屠殺業の若者が殺生する時の着物を脱ぐ、或は市場の畜舎でナイフを研ぐ、

私は彼れの達者口や、云ひまぎらしや、しやべり負けを楽しみながらそこを彷彿。

鍛冶家達が薄汚れた毛胸を挿へて金砧を取りかこむ、

銘々は大鎚を持つてゐる、皆んな出揃つて、火は熱氣を漲らす。

燃えがらの散らばつた戸口の所で私は彼等の動作に注意する、

彼等の腰のしなやかなくねりは雄々しい腕と調子を合はせる、

肩よりも高く大鎚は振り上げられる、そろ／＼と肩よりも高く、しつかりと肩よりも高く、

彼等はせかない、銘々はこゝぞといふところを打つ。

ニグロがしつかりと四頭立ての馬の手綱を握る、鞭き荷は縛り上げられた鐵鎖の下に
揺らぐ、

一三

石工場の長い荷馬車を御するニグロ、彼れは一つの脚を綱切れに頼んで丈高くしつか
りと身構へする、

その藍色の肌衣は豊かな頸と胸とを現はし、腰帯の外に垂れてゐる、

その眼なごしは落着き拂つて威厳を持ち、帽子の鏝を額の所で後ろにはねてゐる、

太陽の光は彼れの縮れた髪と鬚とに落ち、磨き上げた完成な五體の黒さをかゞやか
す。

私はこの晝にしたいやうな大男を見てそれを愛する、私はそこに停つてはゐない、
私も亦荷車と共に行くのだ。

私の衷にある生の愛撫者、それは私の動き行くどこにでも、前方にも後方にも振り向
き、

そつぼうにある壁翕や、つまらぬ曲り角にも振り向き、一人の人をも、一つの物をも
見はぐることなく、

凡てのものを私自身のため、又この歌の爲めに吸収する。

鞭と鎖とを鳴らし、或は木蔭に足だまりする牡牛等、お前の眼の中に表はさうとして
ゐるのは何んだ？

それは私が生涯に讀んだ凡ての印刷物よりも更らに以上に私には見える。

一日がりの遙かな散歩の道すがら、私の跫音は森の牡鴨と牝鴨とを驚かす、
彼等は一氣に飛び立つ、彼等は静々と輪を描きながら舞ふ。

私はそれらの自由な目論見を信頼する、

而して私の衷に戯れる赤、黄、白を承認する、

而して緑や、紫や、簇生する冠を有意味に考へる、

而して彼女が或る他のものでないが故にといふ理由で龜を値打ちのないものとは思は
ない、

而して森の中をかけす鳥は嘗て全音階の稽古はしないが、而かも十分美しく私の爲め

に歌ひさへづる、

而して栗毛馬の姿は私の愚かさを恥ぢ入らしめる。

一四

鷺鳥の牡が冷えくする夜頃を彼れの群れを率ひて飛ぶ、

ヤーホンクと彼れは啼く、而して私を招くが如くにその聲を送る、

きいた風な人間はそれを無意味と思ふかも知れないが、私はつくづくと耳傾けて、
かして、冬空のかなたに、その目的とその重みとを見出すのだ。

鋭い蹄を持った北方の驟、家屋の鉢巻きの上にある猫、四十雀、プレイヤー・ドツ
グ、

鼻打ちならず牝豚の乳房にすがりつく一胎ぶりの小豚、
七面鳥の雛、而して半ば翼を擴けた親鳥、
私は彼等の中に、私の中に、不變な同じ法則を見るのだ、

大地の上に印する私の足跡は數多くの愛を涌かす、
その愛はそれを語らんとする私の最善の努力を笑殺する。

生長してやまない戸外の姿に私は有頂天になる、
家畜の間に生活する人、或は大洋や森林のうつり香を持つ人、
船舶を造る人、若くは操る人、或は斧や大鎚を使ひまはす人、或は馬を御する人、
私は何週間も續けさまに、彼等と共に食ひ共に眠ることが出来る。

最も平凡なもの、最も安直なもの、最も手近かなもの、最も見やすいものが私だ、
進んで機會を掴まんとし、大きな儲けの爲めに消費するものは私だ、
第一着に私を受け入れようとする人に私自身を授けるために私は装ひをする、
私の好意に對して大空の降臨するのを望みなどはしない。
私は自分自身を氣まゝ勝手に振りまくのだ。

一五

朗らかな中音歌手が、オルガンの備へられてゐる高欄で歌ふ、
左官は壁を塗り立てる、その荒饅の舌は險はしく上に撫で上げられる時、口笛のやう
な音を立てる、

結婚した、若くは未婚の子弟が感謝祭の晩餐の爲め家路に馬車を驅る、

水先案内者が(キング・ピン)を握る、彼れは逞ましい腕の力で船を一方に傾ける、船頭が捕鯨船に身づくろひして立ち、投鎗と漁叔とを用意する、

野鴨の獵師が静かな注意深い大跨で歩く、

執事が祭壇に手を十字に組んで受職する、

機織りの女工が大車輪のうなりに合せて且つ退き且つ進む、

百姓が日曜日の散歩の道すがら、圍ひのそばに立ち停り、燕麦やライ麥を眺めやる、狂人が狂癲と確められて遂に病院へと連れられてゆく、

(彼れは決して今までのやうに母の寢室の小寢臺の上に眠ることはあるまい)

灰色の頭と憔悴した顎とを有つた日雇印刷工は活字盤の所で働いてゐる、

噛み煙草を口の中にまろばしながら、その眼は原稿紙の上にかすみながら落ちる。

畸形の四肢が手術臺の上に結びつけられてゐる、

切り放されたものが物恐ろしく桶の中へと落ちる、

白人の血を餘計交へた黒人の女が競賣臺の上で賣られる、泥酔者が酒場のストロフの所でうなづいてゐる、

機械職人は袖をまくり上げ、巡査は受持區域を歩き廻はり、門衛は通行者を注目する、

若者が運送荷馬車を御してゆく(私は彼れを知らないが彼れを愛する)、

混血兒が競走に勝敗を決するため軽い靴の紐を結ぶ、

西方の七面鳥狩りが老若の人々をひきよせ、或る者は小銃に身を凭せ、或る者は木材の上に憩ふ、

群衆の中から銃手が進み出で、位置を定めて立ち、銃の覗ひを定める。

新來の移住者の群れが波止場や船堤に群がる、

獸毛のやうな髪毛の頭が砂糖黍の畑を耕やしてゐる、監督者の鞍の上からの監視を浴びながら、

喇叭が舞踏室に鳴る、紳士等は踊り相手を求めて走り、相手同志は挨拶の腰をかどめる、

若者が眠りもやらず杉板の屋根裏の小部屋に臥つて、音楽のやうな雨に耳傾ける、ウルヴェリン人はヒウロン湖に貢ぎする谿河のほとりに係蹄をしかける、

銅色の蕃婦は、黄の笹縁した衣物に身を包んで、皮鞋とガラス球の袋とを賣物にし、美術鑑賞家は臉を半ば閉ぢて横眼をつかひながら展覽會場を覗き歩く、

波止場人夫が船を繋ふ間に、板橋は上陸の客の爲めに投げられる、

妹は束絲を両手にかゝげ、姉はそれを絲の球に巻き上げる、而して時折りほつれに遇ふと手をやすめる、

一週間位前に初子を生んだ今年妻は健康の回復と共に幸福を感じ、

清々しい髪を持ったヤンキーの娘はミシン仕事をしたり、工場や工房で働き、

敷瓦師は二つ把手の撞槌によりかゝり、探訪者の鉛筆は手帳の上を速かに走り、看板

屋は藍や金の文字を描き出す、

運河の労働者は曳船道を踏みしめて行き、計算係りは事務机で勘定し、靴屋は縫糸に蠟をひく、

指揮者は樂隊に對して棒を振り、演奏者はこれに従ふ、

小供は洗禮され、改宗者は始めての告白をなし、

競走船は灣内に散在して、競走は始められる、(白い帆が輝やきわたるよ)

牧畜者は家畜の群れを見守つてはぐれようとするものに戒めを送る、

小商人は背の荷の爲めに汗し(買ひ人ははした錢を争つてゐる)、

花嫁は白衣の皺をのしてゐる、而して時計の秒針は徐ろに動いてゆく、

阿片常用者は頭をぎごちなげにして倚りかゝり、唇は僅か開かれたまゝ、

淫賣婦はそのショールを引ずり、その帽子は吹出物のした、すはりの悪い頸のところ
で跳ね動く、

群衆は彼女のはしたない悪體口を聞いて笑ひ、男等は眼くばせして嘲笑する、

(悲惨な！ 私はあなたの悪體口にも笑ふまい、嘲笑もすまい)

閣議を開いた大統領は偉大なる閣僚達によつて圍まれてゐる、

三人の老夫人が腕をからみ合せて廣場の上を重々しげに歩いてゆく、

漁船の舟子達が船艙に幾重ねにもをひよう蝶を積み上げる、

ミヅリーの人々が荷物や家畜を引き具して平原を横切つてゆく、

車掌は賃銀を集めるために釣銭で音立てながら列車の中を歩きまはる、

板張職人は床板を張り、ブリキ屋は屋根をブリキで葺き、石工は漆喰ひを求め、

一列になつて背負ひ箱を擔ひながら労働者は前へへと歩く。

期節は移りかはり、無数の群衆は集る、それは七月四日の獨立祭だ(大小砲銃のあら

んかぎりの祝聲)

期節は移りかはり、耕やすものは耕やし、刈るものは刈り、而して冬の收穫は大地に

まろぶ、

湖の上遠いところには、魚突きに出た漁夫が、氷に穿つた孔のそばで見張りながら待
つてゐる、

開拓地のほとりに隙間もなく立つ切株、それを借用人が斧で深く切り込んでゐる、

扁底舟の舟子は夕暮れかけて、白楊胡桃のほとりを漕ぎ急ぐ、

洗熊の獵師はレッド河の流域、テネシー河によつて排水される地方、アルカンサス河

のほつりを横ぎつて歩きまはる、

チャタフウチー、アルタマホウの湖上にかゝる闇の中に炬火はかゞやく、

家長等はその息子、孫、曾孫たちを自分の周囲に集めて夕餉につく、

アボディー(日乾煉瓦で造つた粗末な家)の壁の内、麻布のテントの中には、終日の獵を終へた獵人や獵師が眠る、

都會も眠り、田園も眠る、

生きたものも死んだものも彼等の時の來るまで眠る、

老いたる良人もその妻のほつりに、若き良人もその妻のほつりに眠る。

凡てこれらは内向して私に來り、私は外向してそれらに行く、

而してこれらを成すところのものは多かれ少なかれ私それ自身だ、

而してこれらの一つ又は凡てから私は私自身の歌を織り成すのだ。

私は老いたるもの若きものに屬し、賢きそれと共に愚かなものにも屬する、

他人には無頓着に、而かも他人に留意して、

父性であると共に母性、成人であると共に小兒、

粗雑な原料によつて創られ、而して精微な原料によつて創られ、

數多の國民中の一つの國民、最小でもかまはない最大でもかまはない、

北方人であるかと思ふと南方人、無頓着で而かも親切な農人として、私はかしこオコ

ーニー河のほつりに住む、

商賣の爲めにはいつでも出かけて行くヤンキーだ、私の關節は地上第一にしなやかな關節だ、地上第一に屈強な關節だ、

ケンタッキーの住民は私の鹿皮の脚絆を穿つて谿間やエルクホルンを跋涉し、ルキジヤナ又はジョルジアの住民もさうする。

湖、入江、又は海沿に住む舟人も私だ、私はフージャだ、バツヂヤーだ、バツキイだ。カナダ風の雪鞋にも草叢の中にも手慣れてゐ、或は遠くニューファウンド・ランドの消防夫等とも親しみがある。

滑冰船の群れとも親密で、他のものと共に帆走り又は舵を取る、

ヴァマウントの丘陵の上にあつても、メインの森林の中にあつても家にあつても同様だ、カリフォルニヤ人の仲間だ、自由な西北州人の仲間だ（彼等の肥大な體軀を愛しながら）。

筏師と炭坑夫との仲間であり、握手を交はし飲食に親しむもの凡ての仲間だ、最も單純なもの、弟子、最も思慮あるもの、導師。

手はじめの新發智、而かも幾多の春秋を経來つた巧者、

凡ての人種と階級とに屬し、凡ての地位と宗教とに屬し、

一人の百姓であり、器械工であり、藝術家であり、紳士であり、船乗りであり、クエーカー教徒であり、

囚人であり、間夫であり、碌でなしであり、法律家であり、醫師であり、僧侶である。

私は自分の多趣多様に勝るものに反抗する、

大氣を呼吸するがなほ多くを私の後ろに残す、

而かも私は空威張りをしない、その分を守つてゐる。

蛾と魚の卵とはその分を守つてゐる、

（見ることの出来るかゞやく恒星と、見ることの出来ぬ暗黒な恒星とはその分を守つて

ゐる、

觸れ得るものもその分を守り、觸れ得ぬものもその分を守つてゐる。

二六八

一七

これらはあらゆる時代あらゆる邦々のあらゆる人々の思念で、私によつて創建されたものではない、

若しもこれらが私のものである程度にあなたのものでなかつたら、それはあつて甲斐のないものだ、無きに等しい、

若しもこれらが謎であり、謎を解くことになかつたら、それは何ものでもない、

若しもこれらが遠いものであると同様に近いものでなかつたら、それは何ものでもない。

これは土と水とのある所にはどこでも育ち上がる草だ。

これは地球の面に漂ひ漲るあり來りの空だ。

一八

強烈な音楽と共に私は来る、私のコロネットと私の太鼓と共に、

私は認められたる勝利者ばかりの爲めに進行曲を奏するのではない、私は打敗かされて殺された人々の爲めにも進行曲を奏する。

あなたは勝利を占めるのは立派なことだと聞かされたか、

私は同時にいふ、失脚するのも立派なことだ、戦闘は勝つた時だけが戦闘ではなく、敗けた時も戦闘だ。

二六九

私は死者の爲めに鼓を打ち且つ敲く、

私は死者の爲めに聲高く華やかに歌口を吹く。

失脚した人々の爲めに歡呼！

又戦艦を沈没せしめた人々の爲めに、

船のみならず自ら海に溺れ死んだ人々の爲めに、

戦争に敗北した凡ての將軍の爲めに、打負かされた英雄の爲めに、

世に知られた最も偉大な英雄と同等な世に知られない無数の英雄の爲めに。

一九

これは平等に配膳された食事である、これはひとりでの饑ゑに對しての食事である、

正義の人に對してと同様に邪惡の人に對しての食事だ、私は凡ての人と約束をした、

私はたゞ一人の人と雖も輕視され除外されるのを欲しない、

外妾も、食客も、盜賊もこゝに招かれる、

厚い唇の奴隷も、梅毒病者も招かれる、

それらの人々と他の人々との間に差別は何もおかれないだらう。

これは内氣な手の平の握りしめだ、これは髪毛からたゞよひ出る匂ひだ、

これはあなたに對する私の唇の接觸だ、憬がれの囁きだ、

これは私の顔に映し出された久遠の深さと高さだ、

これは私自身の物思はしい浸潤だ、而して同時に迸出だ。

私に何か解しがたい目論見があるとあなたは思ふか。

さう、それはある、何故なら四月の驟雨にもそれはあるから、而して岩石の側面の雲母にもそれはあるから。

あなたは私が人を驚かすつもりでゐると思ふか。

眞晝の光は驚かすか、明け方の森の木の間じょうびたすにさゝ鳴く上鶴は驚かすか、それら以上に私は人を驚かしてゐるだらうか。

今こそ私は密かにものを語らう。

それを誰れにでも語らないかも知れない、然しあなたにこそ語らう。

そこに行くのは誰れだ、物欲しげに、作法もなく、奇怪にも裸形な。如何なれば私は食するところの肉から力を搾り取り得るのか。

一體人とは何んだ、私とは何んだ、あなたとは何んだ。

私が自分のものだとして印づけるものをあなたはあなた自身のもので覆へすだらう、でなければ、私に耳傾けるのは徒らに時を空費するのだ。

月々は虚ろで大地は泥土塵芥だと、

世界中に泣言をいふ人に對して泣言はいはない。

小言をほざいたり、病人の散薬を包みこむやうなこと、それにばつを合せるのは私の

かゝり合つたことではない、

家にゐようと外にゐようと、被りたい時には私は帽子を被る。

私には祈願をこめる必要はない、私には恭しくしたり威儀をつくらう必要はない。

地層を穿鑿して微細を究め、學者に相談し、綿密に計量して見て、

私は自分の骨にからみついてゐる脂肪以上に美しいものを見出すことが出来ない。

民衆の凡ての中に私は私自身を見る、民衆は決して私以上でも、又僅かに以下でもな

ぬ。

私が自分についていふ長所短所はそのまゝ民衆のそれである。

而して私は知る、私は内には充ち、外には健かだ、

宇宙の事物は混合して常に私のために流れる、

凡てのものは私のために書かれてゐる、而して私は誤たずその意味を捕へねばならぬ。

私は自分が不滅なのを知る、

私の軌道は大工のコンパス位で自由にされるものでないのを知つてゐる。

私は又、子供がいたづらにする暗中の火の輪のやうに、たやすく消えるものでないのを知つてゐる。

私は自分の莊嚴を知つてゐる。

私は自家辯護をしたり、人の理解を苦心するやうな馬鹿はしない、

私は自然の律てが決して申譯などしないのを心得てゐる、

(かういつたとて、結局私は建築用の水準器以上に驕慢な振舞ひをしてゐるのではないつもりだ)

私はありのままに存在する——それで澤山だ、誰れもが私に頓着しないからといって、

私は平氣だ、又誰れも彼れもが頓着するからといって、私は平氣だ。

そんなものより遙かに大きな一つの世界が私に注意してゐる——それは私自身だ。

而して私は今、自己を實現しようとも、千年万年を待たねばならぬとも、

何れにも私は等しく満足してゐるだらう。

私の足がかりは花崗岩に柄できびしく嵌めこまれてゐる、

私は人の所謂壞廢なるものを笑ひ退ける、

而して私は時の廣大さを知つてゐる。

二二

私は肉の詩人である、而して魂の詩人である。

天國の歡喜は私と共にある、而して地獄の苦惱も私と共にある、

前者はこれを私の上に接木して増大する——後者を私は新しい言葉に翻譯する。

私は男性を歌ふ詩人であると同時に女性を歌ふ詩人だ、

而して私はいふ、男性を稟けると同様に女性を稟けるのは偉大なことだ。

而して私はいふ、人の母たる以上に偉大なことは外にない。

私は増長又は救持の歌を唱へるものだ、

私達は小つぽけな謙遜や回避を十分になし盡した、

物の大きさは單に發達に過ぎないといふことを私は示す。

あなたは凡ての人を追ひ越したか、あなたは大統領なのか、

それは些細なことだ——民衆は一人残らずそこに達して、なほその先きに進み出るだ

らう。

私は更けゆく物やさしい夜と共に歩むところの彼れだ、

私は半ば夜によつて捕へられた大地と大海とに對して呼びかける。

近寄れ、胸をあけはたげた夜よ、びつたりと近寄れ、力ある滋味に豊かな夜よ、

南風吹く夜よ、數少ない大きな星に飾られた夜よ、

靜かに頭まねきする夜よ、狂ほしくも裸形な夜よ。

ほゝ笑め、おゝそよ風涼しく淫らげな大地よ！

眠りに入つた、しなやかな樹木を持つ大地よ！

沈み行く落日の大地よ、霧を頂いた山々の大地よ！

かすかに青みがゝつた、清々しい満月の光を浴びた大地よ！

河の流れを色分けする影と日向との大地よ！

私のために更らに輝き、更らに朗らかな、眞珠色の雲を持つ大地よ！

かびろく振り動く肘を持った大地よ、豊潤な林檎の花咲く大地よ！
ほゝ笑め、今こそお前の愛人が来るのだから。

惜しみなく、お前は私に愛を與へた、それ故私も亦お前に愛を與へる。
おゝ言葉にあまるこの熱狂した愛を！

駈入者が私をしつかりと捕へすくめる、而して私もそれを捕へすくめる、
私達はお互ひに、花嫁と花嫁とが互ひを痛め合ふやうに痛め合ふ。

三三

汝大海よ、私はお前にも自分を打任かす――

私はお前が何を欲するかを思ひあてる、
私は海岸から、折りまげて人まねきするお前の指を見やる、
私に觸れることなしにはお前は退き去るのを拒む、それを私は信ずる、
私達は一度は一緒にならなければならない――私は衣類を脱ぐ――私を陸影の見えな
いところに急いで連れ出せ、

軟かい夜着を私に着せ、大濤の中に私を揺すつてまどろませてくれ、
愛欲のしぶきを私に跳ねなげろ――私はそれに必ず報いるから。

渺茫たる大迂波の海原よ、
廣やかな、間歇的な呼吸を呼吸する大海よ、
生命の涙の海よ、掘り起されなければいけれども、常に準備された墓場なる海よ、

嵐の呻きとなり誘導者となるもの、氣まぐれな、あでやかな海よ、

お前と私とは素質が同じだ——私はその一面に似、全體にも似てゐる。

流入と流出とを私は共にする、憎悪と親和との讚美者だ、

互ひの腕に倚つて眠るところの愛人たちの讚美者だ。

私は同情を立證するものだ、

(私は家の中にある品物の表を作つて、それを保持する家をぬかす譯には行かない)

私は善の詩人であるばかりでなく、又悪の詩人であるのを辭するものではない。

徳と惡徳とについて彼れ是れいふのは何んだ、

惡も私を推進し惡の改革も私を推進する、私は平然としてゐる、

私の歩くのはアラ探しの爲めでもなく、又排斥するためでもない、

私は凡て生ひ出たものゝ根に水かふ。

あなたは停止しない懐胎から腺病の發するのを恐れたか、

あなたは大自然の法則が計算しなほされ更正さるべきだと想像してゐたのか。

私は一方に平衡を見、又他の一方に平衡を見る、

溫和な教義も不拔の教義と同じく堅固に役に立つ、

現前の思想と行爲とは私達の起床であり鹿島立ちだ。

この瞬間は過去幾千萬年を超えて私にやつて来た、その瞬間即ち今よりも更らによきものは一つもない。

何が過去に於て適合し、何が今日に適合するかは怪しむに足りないことだ、常にく怪しむべきは、卑劣な人間即ち演神者が存在し得るといふことだ。

二三

長い時代々の言葉の盡きせぬ啓現よ、

而して私の言葉は近代の言葉だ、「共々に」といふ言葉だ。

決して他を妨げない信實の言葉だ、

今でも、これから後でも、その言葉は私に取つて變りがない、私は絶對的に「時間」を受け入れる。

それのみは缺點がない、それのみが凡てのものを圓滿にして完成する、かの神祕的な迷はしげな驚異のみが凡てを完成する。

私は現實を受け入れて、敢て疑ひを挿まない。

徹頭徹尾唯物主義を結びつけながら。

實驗科學萬歳、正確な探究よ榮え長かれ！

檜とライラツクの枝とを交ぜた萬年草を持つて來い、

これは辭書編纂者だ、これは化學者だ、この人は古代カポトツシの文典を作つた、この海乗り達は危険な未知の海上に船を乗り出した、

これは地理學者だ、この人は外科用ナイフを持つて働く、而してこれは數學者だ。

諸君よ、第一の名譽は常にあなたの上に！

あなたの事實は有用だ、而かもそれは私の住家ではない、

私はそこからはいりはするが、私の住家の構へ内に行つてしまふのだ。

(以下四行不明。乞教示)

二四

私はワルト・ホキットマン、一つの宇宙、偉大なるマンハクンの息子、

放漫で、多肉で、性慾的で、食ひ、飲み、且つ生み、

殉情の人ではなく——女性に超越もせず、又女性を卻けもせず、

羞恥なきが如く不恥でもない。

戸の錠前をはげせ！

蝶番ひから戸そのものをはげせ！

誰れであれ、人間を卑しめるものは私を卑しめてゐるのだ。

何事であれ、なされたこと云はれたことは私にさしひどく。

私を通じて流射は流れ出で流れ出で——私を通じて潮流と示唆とは流れ出で流れ出

る。

私は元始的な合言葉を語る——私はデモクラシーのしるしを與へる。

誓言する、私は相對の立場でその相對物を持ち得ざる何物をも受け入れない。

私を通じて啞黙した諸ろの聲々が、

長い代々の獄囚と奴隸等の聲々が、

賣女と不具者の聲々が、

病めるものと絶望せるものとの聲々が、而して窃盜と侏儒達との聲々が、

無劫の準備と蓄積との聲々が、

諸ろの星を繋ぐ鎖——女の胎と男の根との聲々が、

他のものによつて踏み躪られた人々の権利の要求の聲々が、

しみつたれた、平凡な、魯鈍な、侮蔑に値する人の聲々が、

空中の靄、糞便の球を丸める羽虫の聲々が、

私を通じて禁ぜられた聲々が、

性と淫慾との聲々が——面纱された聲々、而して私はその面纱を取り除く、

不淨なものゝ聲々、それは私によつて淨化され變容する。

私は口に指をあてがつて喋むことをしない、

私は頭腦と心臓とに對してなすやうに、腹部をもやさしく保つ、

性交は私に取つて、花が不潔でないのに等しい。

私は性慾と口腹の慾とを尊重する。

見る事、聞く事、觸れる事は奇蹟だ、而して私のどの部分もどこの附纏物も奇蹟だ。

私の内部も外部も共に神聖だ、而して私が觸れ、或は觸れられた私の部分を共に神聖にする。

腋の下の匂ひ、それは祈禱にまさつて芳ばしい匂ひだ。

この頭は教會よりも、聖典よりも、凡ての信條よりも以上のものだ。

若し私が他に勝つて一つのを崇拜するとするなら、それは全體であると一部分であるを問はず、私の肉體だ。

半透明な私の模型、それはお前であるだらう、

物蔭にある墓石と休息所はお前であるだらう、

遅ましい男らしい卑の刃よ、それはお前であるだらう、

私の耕作に従事するものは何んでもお前であるだらう、

汝、私の濃厚な血液よ、お前の乳のやうな流れは私の生命の青白き搾汁だ、

他の胸をかき抱く胸、それはお前であるだらう、

私の頭腦、それはお前の超理的な旋渦であるであらう、

洗はれた菖蒲の根よ、人怯ぢする鶺鴒よ、取り護られた同じやうな卵の巢よ、それは

お前であるであらう、

乾草のやうにこんがらかつた頭髮、髭、腕、それはお前であるであらう、

砂糖楓からしたる樹液、男性的な麥の纖維、それはお前であるであらう、

寛大なる太陽、それはお前であらう、

私の顔を輝かし又は曇らす蒸發氣、それはお前であらう、

汝、汗ばんだ小流れよ露よ、それはお前であらう、

やはらかに擦るやうな生殖器を私にこすりつける風よ、それはお前であらう、

廣潤な雄々しい耕作地、樅の生枝、うねりくねつた私の徑路の散策を愛する人々よ、

それはお前であらう、

私の握つたことのある手、私の接吻したことのある顔、私の荷も觸れたことのある人間、それはお前であらう。

私は自分自身に魂を奪はれる、それほど存分な私があつて、而して十分に濃密だ、凡ての瞬間に如何なることが起らうと私は喜びで身ふるひする、

私はどんなに私の足首が屈折するかを云ひ現はすことが出来ない、同様に、幽かな願

望でもその原因が何處から來るのかいふことが出来ない、

同様に、友情を退けるその原因も、又友情を回復するその原因も。

玄關の階段を私が登るといふこと、そんなことが出来るのかと考へるために私は立停る、

私の窓際の朝顔は形似上學の書物にまさつて私を満足する。

黎明を見やるといふこと！

かすかな光が宏大もない透明な暗闇を追ひ退ける、

大氣は私の味覺に甘く感ぜられる。

無邪氣な戯れの如く運動する地球を支へる力は音もなく高まり、生々と溢れ出で、
高みにも低みにも斜線状に奔騰する。

私が見得ない或ものがその男根を空さまに向け、
輝かしい液體の洪水を空一杯に溢れさす。

大地は大空によつて引きとどめられる、兩者の結合の日毎のおさまり、
その瞬間私の頭上に東方からの挑戦が襲ひかゝる、
侮辱的な嘲罵、果してお前は勝者たるを得るか！

二五

眼もくらむばかり素晴らしい日の出は、直ちに私を殺戮したことだらう、
若しも私が常に／＼私自身から日の出を送り出すことが出来なかつたら。

私達も亦太陽の如くに眼もくらむばかり素晴らしく高揚する、
おゝ我が魂よ、私達は東明の朝すゞと静けさの中に私達自身を見出すのだ。

私の聲は私の眼の達し得ない所に向つてゆく、私の舌のひとひねりで私は大千世界を
巻き包む。

言葉は私の徹視の力と劣りが無い、それはそれ自身を判断する以上の力を持つ、
それは絶えず私を鞭撻し皮肉な調子でいふ、

「ワルト、お前は十分包有してゐる、何故それをぶちまけないのだ」と。

さあ来い、私はもう馬鹿にされてはゐないから、お前はどうものを云はうかと考へ過ぎてゐる、

お、言葉よ、お前の内部に芽生えがどんなに包まれてゐるかを知らないのか、

闇の中にあつて待ち、霜によつて護られて、

土壤は私の豫言的な叫びに應じて退き去り、

私は凡ての原理を正位におくためにその後ろに自分を横たへ、

私の生氣ある部分なる私の智識、それは萬物の意義なる「幸福」と調和を保ちながら、

「幸福」——（私の言葉を聞いたものは男であれ女であれ今日唯今その幸福を求めて發足しろ）。

私の究局の眞價を私はあなたに拒む、私がまことに何であるかを私は人に傳へるのを拒む、

世界を巻き包むとも、私を巻き包まうとは試みるな、

單にあなたの方に眼を向けたゞけで、あなたの中最も小賢かしいものをも最も勝れたものをも押しこめるのだ。

文字も言葉も私をいひ現はしはしない、

私をいひ現はすあらゆるものを私は自分の顔に持ち歩いてゐる。

一黙したゞけで私は懷疑論者を面喰はせて見せる。

今私は耳傾けるだけをしよう、
聞き得たところでこの歌を豊かにし、その響きを歌に貢ぎさせるために。

私は聞く、鳥の妙へな歌聲を、麥の成長するさゝやきを、焔の饒舌を、私の食物をた
ぎらせる小薪のはせる音を、

私は聞く、私の好む響きを、人間の聲の響きを、

私は聞く、凡ての響きが共に流れ、相交はり、融け合ひ、追ひ合ふのを、

都會の中のさゞめき、都會から起るさゞめき、晝と夜との物音、

話好きな若者達が親友へ話しかける聲々、食事中の労働者の高笑ひ、

仲たがひのした友の間の怒りの低聲、病人のかすかな言葉の調子、

机にかたく手をかけて、青白い唇から死の宣告を傳へる裁判官、

波止場にもやはれた船から荷を卸す仲仕のかけ聲、錨をまき上げる人達の復唱、

半鐘の響き、火事の叫び、警鈴をならし紅燈をかゝげて走せ過ぎる蒸氣唧筒車と水管
車とのをたけび、

二列になつて進む協會の行列の先頭に奏でる静かな進行曲、

(彼等は或る柩を護りに行くのだ、旗竿の先きを黒布で包んで)。

私は聞く、ヴァイオリンセロを(それは若きものゝ心の訴へだ)

私は聞く、有鍵コルネットを、それは急がしく私の耳へと入り入る、

それは私の胸から腹に物狂ほしくも甘々しい痛みを捲き起す。

私は聞く合唱を、それはグランドオペラだ、

あゝこれこそは音楽だ——これこそは私の心に叶ふ。

創世の如く偉大にも新鮮なテノールが私の心に満ちる、

歌手のつぶらに開いた口から私は存分にそゝがれ満たされる。

私は聞く、洗練されたソプラノを(彼女にそぐつた見事な藝術)

オーケストラは天王星が飛行するよりも更らにかびろく私を飛行させる、

それは私自身ですら思ひも設けなかつた熱情を私から掴み出す、

それは私を海上に送り出す、私は裸足で足ぶみし、兩脚は物うげな波に管められる、

私は烈しく怒つた靨に鞭打たれ氣息がつまる、

蜜のやうなモルフォネの中に浸たされて、私の気管は假死にまで縊られる、
而して遂に、私達が存在と呼ぶ謎のまた謎を感じ得るやうに支へ上げられる。

二七

兎に角形體を備へるといふこと、それは何だ、

(めぐりめぐつて私達、私達の凡ては行く、而して必ず形體へと歸つて来る)

若し何ものも更らに發展する要素を持たぬとしたら、かたくなゝ殻の中にゐる蛤で澤
山だらう。

私の持つのはかたくなゝ殻ではない、

私が動いて行かうが止つてゐるやうが、私は體中にその時々を指導者を持つてゐる、

その指導者は凡ての物象を捕へ、私を通して無害にそれを導いてゆく。

たゞ單に私は指を動かし、押へ、感知する、而して幸福だ、

私自身を私以外の誰れかに接觸させることは堪へ得られぬほどのよろこびだ。

二八

これは單なる接觸か？ 身ぶるひさせるまでに新しい本性を覚えさせるこれは、

焔と精氣とが私の血管のために突進し、

私の末梢は私に逆らつてそれらを助力すべく延び集まり、

私の肉と血とは私自身とけじめのつかなくなつたそのものを襲ふために電光を發し、

あらゆる點から、淫蕩な刺戟物は私の四肢を強直し、

私の心臓の乳房から拒まれた滴りをもしほり取り、

私に對して思ふまゝに振舞ひ、拒絶を無みし、

たくらめるが如く私から最上のもを掠奪し、

私の衣類のボタンを外づし、裸かな腰をかき抱き、

當惑した私に陽の光と放牧地との静けさを浴せかけ、

無遠慮にも他の凡ての感覺を拂ひのけ、

それらは接觸の賄賂を以て他の感覺と交換し、私の尖端に來つて摩擦する、

何の思ひやりもない、私の力が竭き果てようと、私が怒りを催さうと頓着しない、

それらの周圍の群れをも暫らくの享樂に引き入れ、

かくて凡ては頂地に立つために力を合せて私を困らせる。

哨兵は私の他の凡ての部分を見棄て、しましう、
而して赤き掠奪者に對して私を無援にする、
彼等は凡て頂地に來て見物し、私に反いた助力をする。

私は裏切者によつて棄て去られる、

私は狂ふが如く語り、己れを忘れる、誰れでもない私そのものが最大の裏切者だ、
私は自身先づ頂地に急いだのだ、私自身の手が私をそこに運んだのだ。

汝、狂惡なる接觸よ、お前は何をしようといふのだ、私の氣息は喉につまる、
お前の水門を押開ける、お前はあまりといへばあまりな奴だ。

愛慾にきそひ立つ盲目な接觸よ、鞘にかくれ、頭巾に包まれて、雨かも鋭い齒を持つ
た接觸よ、

私から離れるのがお前をそれほど痛がらせるのか。

到着によつて跡づけられた離別、永久の債務に對する永久の償却、
豊かに降りしきる雨、而してその後の更らに豊かな償ひ。

若芽が萌え出で、相むらがる、而して生々と繁茂して邊石のほとりに立つ、
成熟してかどやかしい、發揮された男性の風景。

凡ての眞理は凡てのものゝ中に潜んでゐる、
眞理はその出現を急ぎもせず拒みもしない、
それは外科醫の産科用鉗子を必要としない、
取るに足らぬものも私にとつては如何なるものとも同様に大きい、
(接觸以下又は以上なものが何所にある)

理論や説教は人を肯かせない、

濕りをもつた夜氣はより深く私の魂に沁みる。

(凡ての男女にそれ自身を證明するものがそれだ、誰れもが否定しないそのものゝみが

それだ)

一瞬時及び私の一つの滴りが私の頭腦を決定する、

私は信ずる、濕つた土くれが愛人同志ともなり光明ともなるだらう、

而して要約の又要約が男なり女なりの食物だ、

而して絶頂とそこにある花が、男女が互ひの間に持つ感情そのものだ、

而してそれらはその教訓から無限に派生して遂に萬有創造を導き出し、

而してあらゆるものが私達を喜ばし、私達はまたそれらを喜ばす。

私は信ずる、草の一片は星々の運行の作用以下ではない、

而して小蟻も同様に完全だ、而して砂の一粒も鷓鴣の卵も、
 而して青蛙は最高のものに取つても傑作であり得る、
 而して這ひからむ懸釣子も天堂の廣間を飾るに足る、
 而して私の手の小つぼけな番ひも凡ての機械を見下し得る、
 而して押しひしやげた頭をして草喰む牝牛は如何なる彫像にも勝つてゐる、
 而して一匹の小鼠は無数の背信者をたぢろがす程の不可思議だ。

私は片麻岩や、石炭や、根のつながつた苔や、果物や、穀物や、菜根と組合はさつて
 ゐるのを發見する、

私の全身は四足獸や鳥類を以て塗るかためられてゐる、
 而して確かに私の後方にあるものから遠く離れてはゐるが、

欲する時にはいつでもそれを呼びもどすことが出来るのだ。

あせることも物耻ぢすることも無駄だ、

私の近づくのを拒んで火成岩がその古い火熱を放射しても無駄だ、
 マストマンがそれ自身の粉碎した遺骨の下に隠れ去つても無駄だ、

種々の物象が遠く離れて立ち思ひくゝの外形に身づくろひしても無駄だ、

大洋が空洞の中に身をちぢめ而して怪物が底深く潜んでも無駄だ、

黒鳶が大空にゐどころを定めても無駄だ、

蛇が蔓草や倒れ木の間を這ひのがれても無駄だ、

麋が森の小徑遠く逃げのびても無駄だ、

鋭利な嘴を持つうみすぢめがラブラダアの北遙かに翔つても無駄だ、

私はすばしこくそのあとにつゞく、私は崖の裂け目の中の巢にまでも登つてゆく、

思ふに私は野獸となつてそれと共に生活することが出来さうだ、彼等はそれほど落つき拂つて自分に満足してゐる、

私は立ち止つて永く／＼彼等を見守つてゐる、

彼等はその境遇にやきもきたり泣きべそをかいたりはしない、

彼等は暗闇の中に眼をさまして自分の罪をなげきながら横はるやうなことはしない、

彼等は神に對する義務の討議などをして私を嘔吐せしめるやうなことはしない、

ひとりとして不満足なものはない——ひとりとして所有慾の爲めに氣を狂はせるものはない、

ひとりとして他の前に跪くものはない——數千年も前に生きてゐた同種類のもの

しても、

ひとりとして、地球のどこに行つても、恭くしたり、馬鹿稼ぎをするやうなものはない。

。

かくて彼等は私との關係を示す、而して私はそれを受け入れる、

彼等は私に私の思ひ出を齎らす——彼等はその所有をもつて明らかにその思ひ出を示す。

彼等がどこからその思ひ出を得たか私は知らない、

私も亦無切の前にその境を経て來て、謬つてその思ひ出を取落したのかも知れない、

私自身はその時も今も永久に動き進みつゝ、

常に、而して速かに、無限であることゝ、凡ての種類を含んでゐることゝ、而してそれに類した思ひ出とを、より多く集め且つ示しつゝ、

私の思ひ出の送り手を度外視はしないが、

こゝに私の愛する一人を探し出し、兄弟のよしみを以て共に行く。

潑瀾として私の愛撫に應へる一頭の牡馬の素晴らしい美しさ、

頭は額のところに高く、耳の間に廣く、

四肢は水々しく澤つやを持ち、尾は長く地を拂ひ、

眼はよい程に離れ合つて、したゝかものらしい光を放ち——耳は見事に形どられて思

ふまゝに動く。

私の踵が彼れの胴を抱く時、その鼻孔は廣がり、
思ふまゝ駈け廻らせてもとの地點に歸る時、その見事な四肢は歡びもて震へる。

私は然しお前を唯暫しのみ用ひて、やがて捨てるのだ、牡馬よ、

お前の歩度に頼む必要は私にはない、私自身がそれよりも早く走り得るのだから、
たゞ佇立してゐる時でも坐つてゐる時でも、私は苦もなくお前を駈けぬけるのだから。

空間と時間！ 今こそ私は私の摸索してゐたものがまことだと知り得た、

草の上を徨ひ歩いた時摸索してゐたもの、

唯ひとり寢床に横はつてゐた時摸索してゐたもの、

而して又薄れゆく曉の星の下に摸索してゐたものが。

私の繫索や底荷は無くなつた、私の眩は波の間に休らつてゐる、

私は山嶺の縁を攀ぢ、私の掌は大陸を被ふ、

私は私の幻想と連れだつ。

都會の正方形の家の傍ら、——木樵と共に宿る丸太小屋の中、

通行錢を徴収する道路の轍の跡に従つて、水無しの谷間や小川の川床に沿ふて、

葱畑の除草をしながら、胡蘿蔔や防風草のうねを耕やししながら、草原を横切り、森の

中に小徑を切り開きながら、

試掘しながら、金鑛を掘り出しながら、新しく購つた樹木を環狀に脱皮しながら、

熱砂に裸まで埋めて焼かれる思ひをしながら、浅い河を引き舟して下りながら、

或は豹が頭上の樹枝をあちこちと歩くところ、藥が獵師に向つて狂暴にふり向くところ、

がら／＼蛇が岩の上に長々と臥そべつて日向ぼつこをするところ、川瀬が魚を捕へ喰んでゐるところ、

鱔魚が吹出物だらけのからだをして沼河のほとりに眠つてゐるところ、

黒熊が草の根や蜂蜜を求め歩いてゐるところ、河狸がその橈のやうな尾で泥をなすり

つけてゐるところ、

生長する砂糖蔗のうへ、黄色く花咲く綿の木のうち、濕つた低地にある稻田のうち、

屋根の高い百姓家のうへ、(そこには海扇形にそりかへつた屋根板があつて雨どひの中から細々と草が引き出してゐる、)

西部地方の柿の樹のうへ、長い葉を持つた玉蜀黍のうへ、青い花の細々とした亞麻草のうへ、

白くまた樺色な蕎麥のうへ、(羽虫や甲虫がその外の虫と共にそこにゐる)

そよ風の来る毎に漣を立て、影をおくライ麥の薄黒い緑のうへ、

注意深く身構へて巖が、つた低い出鼻をたよつて山越えしつゝ、

草に埋もれた小徑を歩み、木藪の葉の間を穿ち進みつゝ、

森と麥畑との間にあつて、ほがらかに鳴く鶉、

蝙蝠の飛びまはる七月の夕暮、暗闇の中にぼたりと落ちる螢、

老樹の根から湧き立つて牧草地に流れてゆく小川、

烈しくその背皮をふるひ動かして蠅を追ひ拂ふ家畜、

臺所につるしてあるチースの搾り囊、居爐裡の石壘にまたがる薪架、梁から花絲のや

うにたれ下る蛛の絲、

打ちおろす返錘、風を切つてシリンダーを回轉する印刷機、

その肋骨の中で恐ろしい激情もて鼓動する人間の心臓、

高く浮揚する梨形の風船(その中には私も浮揚して沈着に下界を眺めてゐる)

滑索でたぐられる救命籃、凹んだ砂におかれた薄緑の卵を孵化する陽熱、

その子と共に遊び決してそれを捨てない牝鯨、

煙の長旗を長く後ろさまに残す汽船、

黒い木の削ぎ片のやうな鰭を現はして水を切る鮫、

不知の海潮に乗つて行く半ば焼けた装帆船、

貝殻は水にひたつた甲板に生じ、死者はその下にあつて朽ちつゝある、

聯隊の先頭にあたつて擔はれる星章の多い軍旗、長々と横はる島を経て近づくマンハ

タン、

私の顔を越えて面被の如く瀧なしてかゝるナイヤガラの下、

戸口の階段の上、戸外にある堅木の乗馬用踏臺の上、

競馬場の上、或は遠足や小踊を楽しみ、或はよいベースボールのゲームを楽しみ、

口汚たない罵りや、思ふまゝなあてこすりや、野蠻な舞踏や、飲酒やどよめきやで賑

はふ女ぬきの祝宴、

鳶色の甘いかたまりを味つたり、稗莖で醸したてを吸ふサイダー醸造場、

そこにある赤い果實の一つ／＼に接吻を送りたいやうな林檎の脱皮、

人員點呼にも、濱の閑遊會にも、親しい友の寄合ひにも、玉蜀黍の脱苞會にも、家の

建上げにも、

ものまね鳥がやさしい喉啼きや、嘴啼きや、叫びや泣き聲をひゞかせるところ、

牧草堆が收穫小屋の中に積まれるところ、乾燥した莖が散亂してゐるところ、種用の

牡牛が小屋の中で待つてゐるところ、

種牛がその男性の業を果たすべく進み出るところ、種馬が牝馬に、牡鶏が牝鶏の上に

乗り重なるところ、

犢が草ばむところ、鶯鳥がこせ／＼した舉動で餌をあさるところ、

目路遙かにもさび互つた大草原に夕陽の影が長まつてゆくところ、

遠く近く數平方哩の大きさに群がつて野牛の歩きまはるところ、

蜂鳥が見えがくれて飛ぶところ、壽命の長い白鳥が頸をうねらせるところ、

笑ひ鷗が人に似た笑ひを笑ひつゝ波打際を掠め飛ぶところ、

生え延びた庭園の草むらに半ば隠された灰白のベンチの上、蜜蜂の巣箱のならばとこ
ろ、

その頭をもたげ、地上に輪がたちになつて頸に縋のある鸚鵡がならばとこ、
アーチ形の墓場の門を潜つて葬式の棺が送られるところ、

垂氷の垂れ下つた樹木を持つた雪の荒地に冬の狼が吠えきそふところ、

眞夜中沼地のほとりに来て黄色いとさかを持つた鶴が小蟹をあさるところ、

游泳者や潜水者の飛沫が暑い午後に涼味を送るところ、

井戸のほとりの胡桃樹の枝頭に益蝻がその淋しい歌笛をかなでるところ、

銀の葉脈を持つた葉に被はれたシトロンや胡瓜の畑を越えて、

獸類が鹽氣を嘗めに來る場所や蜜柑園を越えて、或は圓錐形をなした樅の木の下で、

體操場を越えて、窓被をおろした酒場を越えて、事務所或は公會堂を越えて、

同國人に喜びを感じ、異邦人に喜びを感じ、新しきものにも古きものにも喜びを感じ、
じ、

美しい女と同様にあたり前な女にも喜びを感じ、

ボンネットを取り去り滑らかにものいふ時、クエーカー宗の女の人にも喜びを感じ、

石灰で塗り白めた教會の合唱の調子にも喜びを感じ、

汗みどろになつて眞剣に説教するメソヂイストの牧師にも喜びを感じ、天幕傳道會に
も心から感激し、

午前全體をブロードウエーの飾り窓を眺めくらし、その厚い板ガラスに押しひしやげ
るまで鼻先きをつきつけ、

その午後は雲を打仰ぎながら、或は小道の上、海の汀沿ひを歩み暮らし、

私の左右の手を二人の友達の脇にまいて、而して私は二人の眞中に。

日に焼けた沈黙な草刈りの童と家に歸り（夕ぐれを彼れは馬に乗つて私のあとに）
 人里遠く野獸の足跡或は皮鞋のあとをしらべ、
 病院の床の傍らにあつて熱になやむ病人にレモネードをあてがつてやり、
 寂寞の中に、棺に納められた死骸により添つて、燭火もてそれを熟視し、
 小商ひと冒険のためにあらゆる港に航し、

誰れにもゆづらず氣早やに夢中で近代人の群に交つてあせり歩き、
 憎惡するものに對して怒りに燃え、刺し殺しても悔いぬまで狂暴となり、
 眞夜中、わが裏庭にたゞ獨りゐて、我れを忘れて遠く思ひを馳せ、
 美しくもやさしい「神」の道伴れして古いユダヤの丘陵をさまよひ、
 空間を馳せめぐり、大空と星々との間を馳せめぐり、
 七つの衛星と宏大なその軌道（その直徑に於て八十萬哩）との間を馳せめぐり、

他のものと同じく火の球を放射しつゝ、長く尾をひく彗星の間を馳せめぐり、
 満月なる母をその胎の中に宿す三日月といふ幼兒を持ち運び、
 暴れ狂ひつゝ、享樂しつゝ、計畫しつゝ、愛溺しつゝ、警戒しつゝ、
 取り戻しつゝ、満たしつゝ、現はれつゝ、隠れつゝ、
 夜となく晝となく私はかゝる道を歩むのだ。

私は諸天の果樹園を訪づれてそのみりを見る、
 成熟した無數を見る、而して未成熟な無數を見る、

私は流動し攝容する魂の如くに飛びめぐり、
 私の道は測鉛のとどかぬ下を走つてゐる。

私は物質的であると非物質的であるにかゝはらずわがものにする、如何なる守衛も私を禁錮し得ない、如何なる法則も私を防ぎ得ない。

私はたゞ暫しのみ錨を下ろす。

私の報知船は絶えず航行し去り絶えず回答を齎らして来る。

私は極地生の毛皮や海豹を獵りしに出かける、鋭い石突き杖もてはさまを飛び越える、青白くさくくれた危い氷塊に取りつきながら。

私は前檣樓に登る。

私は夜深く鳥の巢に自分のぬどころを構へる。

私は極氷洋を航海する、そこは十分に明るい。

澄み切つた空氣を通して私は驚くべき美を探りまはる。

宏大もない氷塊が私を過ぎてゆき、又私がそれを過ぎてゆく、眺望は眼に見ゆるかぎり朗らかだ。

雪に被はれた山巔が遙かなところに見える、私はそれに向つて私の空想を送る。

私達はやがてその戦鬪に加はるべき戦場に近づいてゆく。

私達は大きな陣地の前衛を忍びくゞに警戒しつゝ過ぎてゆく。

或は私達は、どこかの大きな廢都に場末からはいり込んでゆく。

その町數や崩れた建物の數は地球の上の凡ての都會を合したよりも更らに大きい。

私は自由な仲間だ、私は侵入軍のたき火のそばで露營する、
私は花婿を寢床から驅り出して、自ら花嫁と枕を共にする、
私は夜もすがら私の腿と唇とに彼女を引きよせる。

私の聲は妻の聲だ、階段の手欄によつての叫び聲だ、
彼等は溺れて水の滴る良人の死體を擔ぎ上げる。

私は勇者の大きな心持ちを知つてゐる、
ありとあらゆる時代の勇氣を知つてゐる、

いかに小船の船長が、嵐にゆられ死に脅かされ、舵を失つて人々のむらがり騒ぐ難破
船を見出し、

近々とより近づき、一インチも身じろぎせず、一ときも心をゆるがせにせず、
板の面に大きく白墨で一安心しろ。俺れ達はあなたを見棄てはしないから」と書き、
難破船の人々と共に苦しみ、その人々と密接し、——而してそれを放抛しようとはし
なかつたか、

いかに彼等がたうとう濡れそぼつた人々を救助したか、
衣紋もくづれて取り亂した婦人達がその墓場なる難破船から救ひ上げられた時どんな
顔をしたか、

聲も立て得ず、老人のやうな顔になつた小兒や、助け出された病人や、口の鋭い、髭
も刺らない荒くれ男達が、どんな顔をしてゐたか、……
その凡てを私は嚙み下す——いゝ味だ——私はそれが好きだ——それは私のものにな
る。

私は一人の男だ——私が苦しんだのだ——私がそこにゐたのだ。

三二八

殉教者の執持と冷静さ、

魔女として火あぶりの刑罰を受ける母、それを眺め入る彼女の子達、

犬に驅り立てられた奴隷が疾走に疲れはて、垣根に身を寄せ、喘ぎ、汗にまみれてゐる、

激痛が針のやうにその脚、その頸を刺す——惨らしい猪弾や小弾、

その人々を私は感ずる、而して私はその人々だ。

私は驅り立てられる奴隷だ。私は犬に噛みつかれて顔をゆがめる、

地獄と絶望とは私の上にある、はた／＼と射手は發砲する、

私は垣根の欄を掴み握る、私の黒血は皮膚の汗にうすめられて地に滴たる、

私は雑草と石くれとの間に打倒れる、

騎者はいやがる馬に柏車をあて、私の身近かを乗りまはし、

遠くをつた私の耳に雑言を放げ、鞭の柄で激しく私の頭からかけてなぐりつける。

苦惱は私の着がへの一つだ、

私は傷いた人にどんな心持ちがすると尋ねる要はない、——私自身がその傷いた人となる、

杖によつて跳めやる時、その痛みはまさ／＼と私に感ぜられるのだ。

私は肋骨を摧かれて散々になつた消防夫だ、

三二九

崩れ落ちた壁がその荒廢の中に私を葬る、

私は熱氣と煙とを吸ひ込む、——私は仲間のけたまわしい呼び聲を聞く、

私は彼等の鶴嘴やシャベルの鋭い音を、失ひかけた意識の中に聞く、

彼等は梁を取り除く、——而して大事に私を擔ひ出す。

私は眞紅なシャツのままで夜氣の中に横はる——隈もない静けさは私へのためだ、

結局苦痛もなく私は横はつてゐる、弱りはてゝはゐるがさうみじめではない、

私のまはりにある顔は凡て白く美しい——その頭は防火頭巾を脱いでゐる、

跪いてゐる群集は炬火の光の中にうすれてゆく。

距りにあるもの、死んだものが甦つて来る、

彼等は日時計のやうに時を示し、或は私の手のやうに動き移る、——私が時計そのものだ。

私は老年の砲手だ——一つ攻城の時の話をしようか。

私は再びその場にゐるのだ。

再び鼓手の早打ちの太鼓の音、

再び攻めかけるカノン砲、臼砲、曲射砲、

再びそれに應じて敵の打ち出すカノン砲、

私も参加する——私は凡てを見且つ聞く、

叫び、罵り、雄たけび——的中した發射に對する喝采、
 紅い滴りを残しながら靜かに通りすぎる死傷車、
 間に合せの修繕をしながら、破損の箇所を尋ね歩く工人、
 裂け破れた屋根から落ちて來る擲彈——末廣がりの炸裂、
 四肢といはず、頭といはず、石材といはず、木材といはず、鐵といはず、高く空中に
 けし飛ばされるその物音。

再びわが瀕死の指揮官の唇から漏れるうめき——彼れは無性にその手をふり動かす、
 彼れは、血まみれの中から喘ぎくいふ「俺れにかまつてゐるな——かまへ——堡壘
 を」。

こゝに一つ、幼ない時テキサスにあつて私が知り得たところを話さうか、
 (私はアラモの陥落の話をするのではない、
 アラモの陥落を語り得るものは一人も助からなかつた。
 百五十人といふ人が今もアラモにあつて沈黙する死者なのだから)。
 それは四百と十二人の若者が冷酷極まる虐殺に遇つたその物語だ。

退却しながら、彼等は行李を胸塔に代へて方陣を作つた、
 彼等の九倍も人数の多い包圍軍から九百の生命を彼等はその前にかたつけてゐた、
 彼等の隊長は傷き、その彈藥は盡き果てた、
 彼等は名譽ある降伏の條件を得、文書と印とを受取つた上で、その武器を解き、捕虜

として歸還した。

三三四

彼等は騎馬隊の仲間の誇りだつた。

乗馬と、射撃と、歌と、食慾と戀事にかけては無敵で、

こせくしないで、氣隨で、寛大で、勇敢で、美男で、誇り高く而して人好きのする、

髭の多い、日にやけた人々で、寛濶な獵服をまとひ、

一人として三十を越したのはゐなかつた。

第二月曜日の朝、彼等は幾圍りかになつて引き出されて虐殺された——それはうらかな初夏のことだつた、

その仕事は五時頃から始つて八時に終つた。

一人として跪けとの命令に従つたものはなかつた、

或る者は無益ながら狂氣のやうに突進を試みた——或る者は勢ひ猛にまじろぎもせず立つてゐた。

數人は頭部や胸部を射ぬかれて立ちどころに倒れた——生者も死者も諸共に横はつた、

片輪にされたもの、斬りさいなまれたものは泥土の中にとつた——残りの受刑者は彼等を目撃したのだ、

或る者は半死半生のまゝ匍匐して遁れようと試みた、それらの人は銃劍で他愛なくしとめられ、或は銃床で打ちのめされた、

三三五

十七にもならない一少年は殺害者に掴みかゝつたが、更らに二人の殺害者がその一人を救ひに來た。

而して三人ともその少年の血にまみれて滅多殺しにされた。

十一時に死體の燒棄がはじまつた、

これが四百と十二人の若者の虐殺の物語である。

三五

あなたは古風な海戦の話を開きたいと思ふか、

月と星との光の下で誰れが勝利者であつたかを知りたいと思ふか、

船乗りであつた私の祖母の父が私に話した物語を語らうか。

全く俺れ達の敵は船にかけてはしれものだつた(と彼れは語り出した)

彼等は佛頂面な英國生れのしたゝか者で——類のない頑固さ、生真面目さ、あとにも

先きにもあんなのはあるまい。

暗らみゆく夕暮れ方を、すさまじい勢で、俺れ達を縦射しながら近づいて來た。

俺れ達は彼奴に通り寄つた——檣桁は互ひにからまり合ひ——大砲は觸れ合つた。

こちらの船長は手を動かして指揮をした。

俺れ達は十八封度もあらうといふ大弾を喫水の下に受けた、

こちらの下甲板では二門の大きな砲が第一發で粉々に破裂して、まはりにゐた者ども

を殺しておいて、天井をぶち抜いて吹き上げた。

日没時の戦闘、夜陰の戦闘、

夜がまはつて十時、満月がのぼり切つた頃、浸水は度を増す五尺が程といふ報告だ、指揮官は舷尾に閉ぢこめておいた捕虜を放つて自分の始末を自分でさせた、

火薬庫への往復は歩哨がついて禁止した。

見慣れない顔が数多く出て来たので、全く気がゆるせなくなつてしまつたのだ。

俺れ達の乗つてゐる巡邏船は火を失した、

助命を求めたらといふ奴も出来た、

艦旗がやられはしないか、而して敗け戦になつたのではないかと。

ところが俺れは呑気に笑つてゐた、俺れの小つぼけな船長の聲が聞えたからだ、
彼れは落着きはらつて叫ぶ「俺達は打撃を與へてはゐない、こつちの戦争仕事は始つ
たばかりだぞ」と。

大砲は三門が役にたつだけだつた、

一門は船長自身が敵の主樁眼がけて指揮してゐた。

榴弾と撒弾とをしこたま備へた二門は彼れの小銃を沈黙させて、その甲板を一掃し
た。

檣樓、殊に主樁の檣樓だけがこの小砲臺の砲火を援助した。

而して戦争の間雄々しくも持ちこたへた。

氣息をつく暇もない。

浸水は仰筒位では間に合はず——火災は火薬庫の方へと喰ひこんでゆく。

仰筒の一つが射ぬかれた——段々と船は沈むなと誰れも彼れも思ひはじめた。

落着きはらつて小柄な船長は立つ、

少しも騒がず——その聲は高くもなく低くもなく、その眼は宣戦の燈火よりも一層強

い光を俺れ達に與へた。

眞夜中近く、あの月の光の下で、彼奴等はたうとう俺れ達に降伏した。

遠く、静かに、深夜はひろがつてゐる、

二つの大きな空ろ船が動きもせず闇の胸の上に、

打貫かれた俺れ達の船はそろ／＼と沈みながら——俺れ達が征服した船へ乗りかへる

準備の中に、

後甲板に立つ船長は、白布のやうに青ざめた顔で冷然と命令を下してゐる、

その側には、船長室の給仕だつた少年の死骸、

長い白髪と、大事に捲きちぢらせた鬚を持つた一人の老船員の死顔、

ある限りの手を盡した甲斐もなく、火焰は高みにも低みにも明滅し、

まだ仕事に堪える二三の士官の噎がれた聲、

積み重つた目茶苦茶な死骸、あちこちに散らばつた死骸——檣や上甲板にはたゞきつ
けられた人肉の切れつばし、

網の断片、繩のかたまり、波にだめられてのかすかな船のゆらぎ、眞黒な無情な大砲、火薬包のつかひかす、強い香り、海風のやさしい微動、海沿ひにある蘆類や野の香ひ、生き残つた人々に言ひ残される遺言の言葉、

外科醫のナイフの鋭い響き、その鋸の刃のはぎしり、フイーズ、クラック、流れ出る血汐の瀧つせ、短かい無残な叫び、而して長く、鈍く、細り行くうめき、こんな鹽梅だつた——取りかへしのつかないことだつた。

三七

貴様、怠け散らしてゐる看守共、貴様の武器に氣をくばれ、無理に戸を押開けて彼等は群がつて来る、私は夢中だ。

私は犯罪者や苦惱する者の凡ての状態を體驗する、他の人と同じ形で牢獄にゐる私自身を見る、而して鈍い絶間ない痛苦を感じる。

私の爲めに囚人の看守は短銃を肩にして警戒をする、朝たにつれ出されて夜々幽閉されるのは私だ。

手錠をかけられた暴動者が牢獄に歩むところには、私も亦その人と手錠を連ね、その傍らにあつて牢獄を歩む、

(私はそこにあつて最もしほたれて最も沈黙する一人だ、而して引きつゝた私の唇には憂愁が宿る)。

若者が竊盜犯で捕縛されたところには、私は必ず出かけて行つて裁判を受け宣告を聞く。

虎疫にかゝつたものが最後の呼吸をして横はつてゐるところには、私も最後の呼吸をして横はつてゐる。

私の顔は青白く、——私の筋肉はよれねぢれ——人々は私を避け遠ざかる。

乞ひ求める者は私に於て彼等自身を體現し、私は彼等に自身を體現する、私は帽子をさし出し、恥かしげに座して乞ひ求める。

十分だ！ 十分だ！ 十分だ！

何かしら私は血迷つてゐた、後ろに退がれ、

締めつけられた私の頭、眠り、夢、痴呆のあなたに少しばかりの休みを與へてくれ、

私はいつもの誤謬に陥りかけてゐたのを發見する。

私が罵るものや蔑むものを忘れることが出来たらなあ、

私を下りやまぬ涙を忘れ、大頭棒や鐵鎚の打撃を忘れることが出来たらなあ、

私が別な眼で私自身の磔刑や血に染つた冠りものを見ることが出来たらなあ。

今私は思ひ出す、

私は滞らした断片を拾ひ上げる。

三四六

岩の墓はその中に、或はどの墓の中にも、任かされてあつたものを増加する、死屍は起ち上り、深傷は癒やされ、つめものは私から離れてゆく。

私は至上の力を以て力づけられて隊をなして進み出る、平等な無終の行列の一つとして、

私達は奥地にも海岸にもゆく、而して凡ての境界を乗り越す、

私達の敏速な布令は全地球の上に赴き、

私達の帽子にかさす花は幾千年かけて咲き出たものだ。

選ばれたるものよ私はあなたに挨拶する、進み出られよ、

あなたの註釋を續けよ、あなたの質疑を續けよ。

三九

友誼深くわだかまりのない蠻人、彼れは何人だ、

彼れは文明の到來を待つてゐるのか、或はそれを乗り越えて咀嚼してゐるのか。

彼れは戶外で育てられた西南洲の人なのか、彼れはカナダ人なのか、

彼れはミシシッピ地方の人なのか、アイオアか、オレゴンか、カリフォルニアか、

山岳地方か、大草原の生活か、森林生活か、或は海から來た船員か。

彼れが何處に行かうと、凡ての男女は彼れを受け入れ彼れを所望する、

三四七

彼等は彼れが彼等を好み、彼等に觸れ、彼等に語り、彼等と共にあらんことを所望する。

三四八

飛雪の如く掬てなき振舞ひ、草の如く單純な言葉、櫛らぬ頭、笑ひ、純朴さ、徐ろに運ぶ脚、ありきたりな顔容、ありきたりな態度と放射、それらは彼れの指先から新しい形で滴り、それらは彼れの身體と呼吸の匂の中に浮遊し、彼れの瞥視から飛び出して來る。

四〇

耀かしい太陽の光よ私はそれに浴する必要はない——光被せよ、お前は單に表面だけを照らさうとする、私は表面といはず深みにもはいり込むのだ。

地球よ、お前は私の手から何ものをか求めてゐるやうに見える、いへ、昔ながらの地瘤、お前は何を要するのだ。

男よ或は女よ、どれ程あなたを好いてゐるかを私は告げたいと思ふ、けれどもそれは言葉に餘る。

又何が私の衷にあり、何があなたの衷にあるかを告げたいと思ふ、けれどもそれは言葉に餘る、

又私の抱いてゐるあの懐がれ——晝夜をわかたぬ私の動悸を告げたいと思ふが……

見よ、私は談義はしない、又小つぼけな慈善もしない、私が與へる時には私自身を與へるのだ。

三四九

そこに、力萎えて、膝節のゆるんだあなたよ、襟巻きで包んだあなたの口を開ける、私があなたの内部に元気を吹きこんでやるから、
掌を開け、而して衣囊の垂れをあげる、

私は拒まれてはゐない——私は迫る——私は分與し得るものを潤澤に貯へてゐる、而して私のものはどんなのでもそれを授ける。

私はあなたが誰れであるかを問はない、それは私には大切なことではない、あなたは何事をもなし得ない、何ものでもあり得ない、然し私が意欲する以上は、あなたをひつくるめて意欲するのだ。

綿畑の労働者或は便所の掃除人の方に私は倚りかゝつてゆく、
彼れの右の頬に私は親しい接吻を與へる、
而して私の心の奥で、決して彼れを見棄てまいと誓ふ。

子を生むに適した女達に私は更らに肥つて更らに元氣のよい子種を植ゑつける、
(私はこの日際立つて豪放な共和國の要素を注ぎこみつゝあるのだ)。

臨終の人があつたら誰れ彼れを問はずそこに私は駆けつけて戸の握り手をひねる、
寢臺のすその方に夜着を折りかへす、
醫師と僧侶とをかへらしてしまふ。

私は下りゆく人をひつつかむ、而して強烈な意志を以て彼れを引き上げる、
 おゝ失望するものよ、こゝに私の頸があるぞ、
 神かけて！ あなたは下つて行つてはいけない、
 あなたの全身の重みをかけて、いゝから私にぶらさがれ。

私は宏大もない呼氣を以てあなたを膨らがしてやる——私はあなたを浮び上らせる、
 武装した軍勢を以てこの家の凡ての部屋を充ち満たせる、
 私を愛する人々、墳墓を無視する人々で。

眠れ、私と彼等とは夜もすがら守護をするから、

疑ふな——死はあなたの上に指もをくことをなし得ないだらうから、
 私はあなたを抱擁する、而してこれからはあなたを私一人のものにする、
 而してあなたが朝になつて起き出ると、私のいつたことが、いつた通りになつてゐる
 のを知るだらう。

一四一

仰向けになつて片息をつく病人に救助を齎らすものは私だ、
 而して雄々しく屹立する人々に對しても私はなほ必要な助力を送るのだ。

私は宇宙について如何いふことが云はれたかを聞いた、
 幾千年にかけてそれを聞き又それを聞いた、

詮じつめたところ、それは中庸を得るといふことだつた——然しそれだけだらうか。

増大しつゝ應用しつゝ私は来る、

物慣れて注意深い行商をしよつばなから高値で打敗かしながら、

自らエホバの正確な面積を計りながら、

クロノスや、その息子のデュスや、そのまた息子のハーキュリスを石版印刷にしな
がら、

オリシス、イシス、ベラス、ブラマ、ブダの下圖を買ひながら、

私のボート・フォリオの中にマニトをとどつけずにおき、一枚の紙の上にはアラアを、

印刷して十字像を、

オーディンと恐ろしい顔のメキシトリとその他の偶像や畫像と共に、

それらのものを凡て一錢もかけ値のない相當な値打ちで計り、

それらのものが生きてゐて、銘々になつた仕事をし遂げたことを許し、

(以下二行不明、乞教示)

私自身の衷によりよきものを満たすために、走り描きの神のスケッチを受け入れ、私

の逢ふ男又は女にも自由にそれを授け與へ、

家を建てつゝある大工の中に神に等しいもの、或はそれ以上のものを發見し、

袖をまくり上げて、木鎚や鑿を振ふ彼れの爲めにより高い要求を尤もとし、

特別な天啓なるものに故障もつけず、私の手の甲のあるちゞれた細毛或はその一本の

毛をも如何なる天啓にも劣らない不思議なものと考へつゝ。

蒸汽唧筒と繩梯子に倚る若者等は私の眼には古への戦ひに於ける神々以下ではなく、

彼等の聲が崩壊の激音の中にも際立つて響くのに注意し、
 彼等の頑丈な肢體が炭になる程焼け進んだ木ずりを突きぬけ、その白い額が火焰の中
 でも傷けられず安全なのに注意する。

如何なる人の爲めにも仲裁する機械工の細君、その胸に赤坊が倚りついて乳を飲んで
 ある傍らには、

シャツの胸を開けひろげた三人の強健な天使によつて用ひられ、一列になつて音を立
 てながら收穫する大鎌、

赤毛で齒なみの悪い馬丁は過去と未來との罪の償ひをし、

その所有物の全部を賣り、その兄弟の爲に辯護人を頼むために徒歩で旅し、貨幣質造
 の科で裁かれる間も兄弟の側を離れない。

私の身のまはりの平方ロッドに存分に散布されたものゝ凡て、それでも平方ロッドは満

たされてはゐない、

牡牛や羽虫は嘗て半分ほど十分に崇拜されてはゐない、

糞尿や塵芥は夢想されてゐたよりも更らに嘆美すべきものだ、

超自然といふことも驚くには足りない、私自身が最高者の一人たる時がやがて来る、

最上者と同様の善事を同様に偉大になすであらう時が私のために用意されてゐる、

私の罌丸にかけて！ 既に一箇の創造者となり、

今こゝに私自身を捕捉しがたい影の子宮の中に置く。

四二

群衆の眞たゞ中の叫び、

私自身の聲、遠く達し決定的に朗らかな。

來たれ、私の子達よ、

來たれ、私の少年達と少女達、私の婦達、家族と身内のもの達、

今演伎者はその神経を働かす、彼れは彼れの衷なる小笛にその序曲を奏し終つたのだ。

氣樂に書かれありのすさびに觸れられた絃よ——私はお前のクライマックスと終曲との單調な調子を感じる。

私の頭は私の頸の上に廻轉する、

音樂は奏で出される、然しオルガンからではない、

人々は私の周圍にゐる、然し彼等は私の家庭のものではない。

常に堅固な浮沈のない大地、

常に喰らふもの及び飲むもの、常に日出ならびに日没、常に大氣と小休みなき潮、

常に私自身と私の隣人、生き／＼として、人の悪い、現實の、

常に昔ながらの解きがたい疑問、常に荊に傷けられた拇指、渴望と渴欲との呼氣、

常に人の氣に逆らうもの、怒號の聲、私達が狡猾な奴の隠れ場を見出してそれを連れて來るまで續くところの、

常に愛、常にすゝり泣く生命の液體、

常に頸の下の繻帶、常に死の柩臺。

こゝかしこには、頭腦が言葉どほりに取り上げる口腹の慾を満たさんが爲めに、小錢を眼の先きに描きながら歩きまはり、

入場券を買つたり、受けたり、賣つたりしながら、饗宴には一度も足を踏み入れず、多くのものは汗をかき、地を耕やし、穀物の實をふるひ、而してその代償として藁屑を受け、

少數のものは懐ろ手で所有し、而かも彼等は絶えず小麥を要求する。

これは都會だ、而して私はその市民の一人だ、

他の人に興味あらしめるものは私をも興がらせる、例へば政治、戦争、市場、新聞、學校、

市長と市會、銀行、關稅、汽船、工場、倉庫、商店、不動産と動産。

夥しい小さな倭人が燕尾服にカラーを着けて跳ねまはる、

私は彼等が何ものであるかゞ解つてゐる（彼等はたしかに虫けらでも蚤でもない）

私は私の複製であるものを承認する、最も弱いもの、最も淺薄なものが私について廻つてゐる、

私のいふこと爲すことは彼等も持つてゐる、

私の心に醸されるあらゆる思想は彼等の心にも醸されてゐる。

私は完全に私の自分勝手なのを知つてゐる、

私の雜食的な詩句を知り而して少しでもそれを隠し立てして書いてはならぬのだ。

印刷され製本されたこの書物——然し印刷屋と印刷所の小僧とは？

上手に撮れた寫眞——然しお前に近かく腕に抱かれた細君或は友達は？
 鐵で装はれ、砲塔に大砲を持った黒色の船——然し船長と機關士との勇氣は？
 家の内には皿類や、道具や、家具——然し主人夫人、及び彼等の眼の監視は？
 かしこなる大空——然かもこゝ或は隣家、或は往來の向側の家は？
 歴史の中の聖者と賢人——然かもあなた自身は？
 説教、教條、神學——しかし不測なる人間の頭腦は？
 而して道理とは何、愛とは何、而して生命とは何ものだ？

四三

僧侶よ、時と處とを選ばず、私はあなたを輕蔑しはしない、
 私の信仰は最大の信仰であり最小の信仰である、

古代と近代との敬神を併せ、而して古代と近代との信仰の間にある、
 五千年の後再びこの地球の上に現はれることを信じ、
 神託による應答を期待し、神々を崇め、太陽を禮拜し、
 最初に眼に觸れた岩や木株から偶像神を造り、魔術の輪の中で杖もて祈禱を行ひ、
 喇嘛僧や波羅門僧が偶像の爲めに獻燈する時それを手傳ひ、
 生殖器崇拜の行列に加はつて市中を舞ひ歩き、
 赤脚仙ジツクセンとなり森林の中にあつて熱中莊嚴し、
 觸髓杯から蜜柑酒を酌み、シスタラやヴェダを讚嘆し、コーランをも心にとどめ、
 石片や小刀から滴つた凝血もて點綴された蕃神殿を歩み、蛇皮鼓をたゞき、
 四福音書を受け入れ、十字架にかけられた彼れを受け入れてその神性をたしかに認
 め、

彌撒に跪き、清教徒の祈禱に立ち上り、或は忍耐して食堂の椅子に坐り、狂氣じみた危機にあつて放言し泡を吹き、或は死ぬるが如く靈の私を起ち上らせるのを待ち、

舗道と大地の上を眺め互し、或は舗道と大地の外を眺め互し、輪廻の輪廻を取り結ぶものに私は屬するのだ。

かの求心的で又遠心的なる群團の一つを私は廻轉させ、而して旅立つ前に命令を残しておく人のやうに語る。

遲鈍にして擯斥されるところの懷疑者、

移り氣、不機嫌、氣鬱、憤怒、氣取り、落膽、不信仰、

私はお前達のどれをも知つてゐる、私は苛責と疑惑と絶望と不信心の海原を知つてゐる。

何と蝶が飛び跳ねるよ、

痙攣と血潮の噴出に伴つて何と彼等が電光の如く急激に身をちよめるよ。

平和あれ、懷疑者と不機嫌な鬱氣やみの血みどろな蝶よ、

私は誰れにも劣らずあなた達の中に位置を占めるのだ、

過去はあなた達をも私をも凡ての人をも押し出した、それは全く同様だ、

而して未だ試みられず、後試みらるべきものは、あなた達にとつても、私にとつても、凡ての人に取つても、それは全く同様だ。

私は今後でなければ試みられないものが何んであるかを知らない、然し私は、その機が来れば十分に役に立ち、而して失敗に終らないのを知つてゐる、過ぎ去るものは凡て商量される、止るものは凡て商量される、一人といへどもそれに漏れることは出来ない。

死んで葬られた青年も商量されずにはゐない、

死んでその男の側に葬られた若い女も、

戸の隙間から覗いたと思ふと姿を隠してそのまま再び影を見せなくなつた嬰兒も、

目あてもなく生活し、それを水腫よりも更らに苦痛に感じてゐる老人も、

ラム酒と悪疾の爲めさいなまれて貧民院にあるその人も、

虐殺され或は難破した無数の人々も、而して人間の屑と云はれる野蠻なクプー人も、

食物をすべり込ませるために口を開いたまゝ浮き漂ふアミーバも、

地球の中のいかなるものも、或は地球の最も古い墓の下にあるいかなるものも、

幾萬の天體にあるいかなるものも、或は天體に棲息する無数のものも、

現在も、或はありとあらゆる最微の無用物も商量されないものはない。

四四

今こそ自身を説明すべき時が来た——さあ起ち上がらう。

私は既知の事柄をかなぐり捨てる、

而して私と一緒に凡ての男女を未知の境へ送り出す。

時計は瞬間を指し示す——然しながら永遠は何を指し示すと思ふか。

私達は既に業に無限の冬と夏とを使ひ盡した、而かもその先きに無限の夏冬があり、その先のきにもなほその無限がある。

誕生と共に私達は豊満と多趣とを稟けた。

他の誕生は更らに豊満と多趣とを齎らすだらう。

私は一つのをより偉大で、一つのをより劣小だと呼ぶことをしない、その時と處とを得たものはいかなるものとも同等である。

人類はあなたに對して殺伐で嫉妬深かつたか、わが兄弟姉妹よ、私はそれをお氣の毒に思ふ、人類は私に對しては殺伐でも嫉妬深くもなかつた、凡てが私には柔和だつた——私はくよくよしながら勘定はしてゐない。
(私と嗟嘆とは何のか、はりがあらうぞ)。

私は成就されたものゝいやはてどあり、而して現はれ來るべきものゝいやさきである。

私の脚は階梯の頂點の又頂點を踏む、

一階毎に一群の時代が、幾階かの間に數群の時代が、

その凡て下にあるものを私は確かに旅して來、而かもなほ登りに登る。

階を登るごとに背後に残した幻影は首を伏せる、

遙か下方にあたつて、私は絶大な最初の無を見る——あすここにさへ私がゐたのを私は

知つてゐる。

私は人に現はれずに常に待つてゐた、而して昏睡の霧の裡に眠つてゐた、

而して私の時の熟するのを待つた、而して毒氣を吐く炭素からは害を被らずにゐた。

長い間私は強く抱きすくめられてゐた——長い、長い間。

私のための準備は宏大なものだつた、

私を介抱した腕は忠實で丁寧だつた。

快活な舟子のやうに、ひた漕ぎに漕いで、久遠の「時間」は私の搖籃を船渡しした、
私に餘地をつくるために星々はその軌道をまげて動いた、
而して私を抱くべきものを物色するための光を送つてよこした。

私が母から生れ出る前、永い時代が私を導いた、

私の胚種は決して生氣を失はなかつた——何者もそれを壓倒することが出来なかつた。

私の胚種のために星雲は一つの球體に凝結し、

地層は徐ろに時をかけて他の地層の上に積み重なり、

廣大な植物はそれに滋養分を供給し、

巨大な原始動物はそれをその口に運んで、大事にかけて地上においた。

凡ての力が私を完成しよるこぼすために止む時なく用ひられたのだ、
而してこの地點に、今こそ私は私の健全な魂と共に立つのだ。

四五

お、青春のかけ橋よ、絶えず推進する弾力よ、

お、成年よ、落ついて、華やかで、而して充實した。

私の愛人達は私を息づまらせる、

私の唇に叢がり、私の皮膚の氣孔に密集し、

街頭や公會堂で私に身をすり寄せ、夜には裸體で私に來り、

晝には、河岸の岩からオーイと叫びかけ、私の頭上に揺り動きさよめき合ひ、

花床や、葡萄の木蔭や、入り組んだ下草から私の名を呼び、

私の生活の各瞬間をかどやかし、

やさしいなだめの接吻で私の身體を接吻し、

しとやかに彼等の心臓から手一杯を取り出してそれを私のもものとして與へる。

莊嚴に現はれ出る老年期、お、死に近づきゆく齡の好もしく名狀しがたい優美さ。

あらゆる状態は單にそれ自身を宣明するばかりでなく、その後に發生するもの、又は
それ自身から發生するものをも宣明する、

而して暗黒なかの寂滅も他の凡てと同様に宣明する。

三七四

夜、天窓を開いて、私は遠く散布する星彙を見る、

私が出来ただけ高く見きわめるに従つて増加するその凡てのものも、更らに遠い星彙の外縁に觸れるに過ぎないのだ。

廣く更らに廣く星彙は擴がり、擴大し、常に擴大し、

外方に更らに外方に、而して永遠に外方に。

わが太陽は彼れの太陽を有し、その周囲を従順に回旋する、

彼れはその仲間と更らに勝れた軌道の群れとを繋ぎ結ぶ。

而してより偉大な彙群が現はれ、その中にあつては最大の彙群と思はれたものも點の如く小さい。

そこには止度はない、決して止度はあり得ない、

若し私と、あなたと、星々と、而して星々の内外にある凡てのものが、この瞬間に

色彩もない浮游物に還元したとしても、結局それは詮ないことだ、

私達は必ず私達が今立つてゐるやうなものを再び創り出すだらうから、

而して必ず以前通りの遠さまで進むから、それからまた遠く更らに遠く。

無限といつてもいゝ面積、それにもまさる大きさの平方リーグも宇宙のかけ橋を危くし、又はそれを不安にさせることは出来ない。

三七五

それらのものも部分に過ぎない、單なる一部分に過ぎないのだから。
思ひきり遠く眺めて見ても、その外になほ無限な空間がある。
思ひきり多く數へて見ても、そのまはりにはなほ無限の時間がある。

私の密會の場所は定められてゐる、それは確かなことだ、

天帝はそこにゐるだらう、而して完全な關係を彼れに對して造り得た私が來るのを待つてゐるだらう、

偉大なる「仲間」、私が憬がれてゐるまことの愛人はそこにゐるだらう。

四六

私は私が最上の時間と空間とに住むのを知る、而して決して私を知り抜いた人は嘗て

なく、而して決してないのを知る。

私は不休の旅を旅するものだ(來て聞けよ凡ての人よ)

私の目印は雨除け外套と、堅固な靴と、森の中から切り出した筈だ、

私の友は一人として私の椅子にくつろいで坐ることが出来ない、

私には椅子もない、教會もない、哲學もない、

私はいかなる人をも饗宴と圖書館と取引所とに連れてゆかない、

けれども讀者の男なり女なりの凡てを一つの丘の上に連れてゆく、

私の左の手を腰のあたりに巻きそへながら、

私の右の手で大陸の風光と大道とを指しながら、

私も、又いかなる他の人もあなたのためにその道を旅することは出来ない、

あなた自らでそれを旅しなければならぬ。

三七八

それは遠くはない、そこに行き着くことが出来る、

恐らくあなたは生れると共にその途上にあつてそのことを知らなかつたのだ、

恐らく大道は陸の上、水の上、到るところにあるだらう。

あなたの衣類を羽織れ愛する息子よ、而して私は私のを羽織るだらう、而して連れ立

つて急ぎ進まうではないか、

驚異すべき都會や自由な國々を進み行くまゝに誘ひ伴はう。

若しあなたが疲れたら、私に二人分の荷をよこせ、而してあなたの手のひらを私の腰

にあづける、

而してそのうちには、あなたが私に對して同じ勤めを果す時が来るだらう、

私達が發足した以上は、決して再び横になりはしないのだから。

この日黎明前、私は丘の上に登り、諸天を仰ぎ見て、

私の靈に云つた「私達がこれらの諸天、及びその中にある凡てのものゝ喜びと智慧とを抱有することが出来たら、その時私達は飽き足り満ち足るだらうか」

私の靈は云つた「否、私達はその高所を夷らかにするや否や、それを過ぎ越えて更らに躍進するのみだ」と。

あなたも亦私に問ひかける、而して私はそれを聞く、

三七九

私は答へよう、私はそれに答へることが出来ない——あなたは自身で答へなければ
ならないのだ。

暫らくそこに坐れ、愛する息子よ、

こゝにビスケットがあるから食へ、而してこゝに飲むために牛乳もある。

然しあなたが眠り、而して快い衣服で活気づくや否や、私はあなたに「さよなら」の接
吻を與へる、而してこゝから出發せよとあなたのために門を開くのだ。

十分長く、あなたはさげすむべき夢を見續けてゐた、

今私はあなたの眼から眼脂を洗ひおとす、

あなたは光の眩惑と、あなたの生活の各瞬間とに慣れなければならない。

長い間、あなたは岸邊の木材につかまつて、恐る／＼水を涉つてゐた、

今私はあなたが勇悍な游泳者であることを要求する、

海のだゞ中に飛びこんで、再び浮き上つて、頭で私に合圖をし、叫び聲を揚げ、から
からと笑ひながら髪ふり亂して、

四七

私は運動家の教師だ、

私の傍にあつて私のより更らに廣い胸をあらはにして見せるものは、私自身の胸の廣
さを證明してゐるものだ、

教師を撥無する爲めに私のスタイルに従つて學習したものは私のスタイルを最も尊敬

するものだ。

三八二

私の愛する少年、その人は他から力を引き出して成年になるのではない、然しながら
彼れ自身の権利によつてだ、

迎合や恐怖の故に有徳たらんよりは寧ろ不徳である人だ、

彼れの愛人を受し、彼れの焼肉を嗜み、

報ひられない戀や輕侮は、鋭い刃物の傷よりも彼れを痛め、

乗馬にも、戰鬪にも、射撃にも、航海にも、第一人者で、歌も歌ひ、バンヂョウも弾じ、

石鹼を塗りこくる奴等の凡てよりも、切り傷や、髭や、痘痕でぶつく／＼になつた顔を好

み、

太陽を避けるやうな奴等よりも十分日焼けのしたのを好むその人だ。

私は私からはぐれ去れと教へるが、誰れが私からはぐれ去ることが出来よう、
あなたが誰れであらうとたつた今から私はそのあとをつける、
あなたが私を理解しない限りは私の言葉はあなたの耳をむづつかせる。

以上のことを一弗を得んがために云ふのではない、或は舟を待つまの時間つぶしに云
ふでもない、

（あなた自身が私同様のとをいつてゐるのだ、私はあなたの舌の役目をしてゐるのだ、
あなたの口の中にとぢられてゐたもの、それが私にあつてほこれ始めたのだ）。

私は誓ふ、私は二度と再び家の中で愛や死を語らないだらう、

三八三

而して私は誓ふ、私は決して私自身を翻譯することをしないだらう、外氣の中にあつて窃かに私ととゞまる男或は女の外には。

若しあなたが私を理解しようと思つたら、高みの上か岸邊に行け、眼の先のの鮎は一つの解説となる、波の一しづく或は動搖は鍵になる、大槌や、車や、手鋸やは私の言葉に合力する。

日よけをした部屋や學校は私と交渉を持つ譯には行かない、亂暴者や小さな小兒の方が遙かに交渉を持つ。

若い機械工は最も私に近いものだ、彼れはよく私を知つてゐる、

斧と水甕とを携へてゐる木樵は一日中でも私を手放さない、

畑を耕やしてゐる若い農夫は私の聲の響きを快く感ずる、

帆走る船の中には私の言葉も帆走り、私は漁夫や水夫と共にあつて彼等を愛する。

宿營し或は進軍する兵士は私のものだ、

戦闘の起りさうな前の晩に多くの人は私を求める、而して私はその人々に無駄をさせない、

その嚴肅な夜に（それが彼等にとつての最後の夜かも知れない）私を知つてゐる人々は私を求める。

獵師がたゞ一人毛布に包まれて眠つてゐる時、私は顔をその顔にすり附ける、

私のことを考へてゐる御者は、彼れの荷馬車の動搖を心にかけない、若き及び老いたる母は私を理解する、娘と妻とは暫らく針の手を休めて自分が何所にゐるのかを忘れ、彼等と凡ての人とは私が彼等に語つたところを思ひ起す。

四八

私は魂が肉體以上のものではないと云つた、
而して私はいふ肉體も亦魂以上のものではないと、
而していかなるものも、神すらも、一人のものに取つては彼自身より偉大ではない、
また彼れの行程を同情なくして歩くものは、經帷子を着て彼れ自身の葬式に歩いてゆくものだ、

また私であれあなたであれ、十錢だけでも懐中しないで土地を選り取りに買ふことが出来る、

また一眼見ること、植木鉢の中の莖を示めすこと、それだけで凡ての時代の學問を見返すことが出来る、

また如何なる商賣であれ仕事であれ、若者が従事して英雄となり得ないものはない、
また廻轉する宇宙の轂となり得ない程やくざなものは一つとしてない、

而して私は凡ての男と女といふ、千萬の宇宙の前にもあなたの魂を落着き拂つて冷靜に保てよと。

而して私は人類にいふ、神といふものを不思議がるには及ばないと、
何故ならいかなるものにも不思議がる私が神といふものを不思議がつてはゐないのだ

から、

(どんなに言葉に綾をかけても、私が「神」と「死」とについて如何に平静でゐられるかを説きあかすことは出来ない)。

私は事々物々に神を聴き神を見る、而かも露ほども彼れを理解してはゐない、或は私自身以上に不思議なものが果してあるかをも知るに苦しむ。

何んで私が今日見るよりもよりよく神を見る必要があらう、

私は二十四時間中の各の時間に、又各の瞬間に神を垣間見る、

男達や女達の顔の中に私は神を見、鏡に映る私自身の顔に神を見る、

私は神からの手紙が街頭に落ちてゐるのを見出す、而してその凡ては神の名によつて

サインされてゐる、

私はその手紙があるところにそのまま捨てておく、何故なら私が何所に行かうと、誤らず他の手紙が常にくゞ現はれるのを知つてゐるから。

四九

汝死よ、定命といふ情け容赦のない老婆よ、お前が私をおびえさうとしても無駄なことだ。

ひるむことなく産科醫は彼れの仕事に取りかゝる、

私は名手が歴し、受け、支へるのを見る、

私は巧妙にも柔軟な表戸の闕に凭れかゝる、

而して出口に意をとゞめ、而して放釋と脱出とに意をとゞめる。

而して汝死屍については、私はお前を恰好な肥料だと考へるが、然しその考へは私を
いま／＼しくはさせない。

私は甘い香ひもて成長する白薔薇のかほりを嗅ぐ、

私は木の葉の唇に觸れる、又メロンのつや／＼した胸に觸れる、

而して汝生命については、私はお前が多くくの死の遺物に相違ないと思ふ、

(疑ひもなく、私はこれまで一萬度も自分が死んでゐるのだ)。

おゝ天の星々よ、私はお前がそこでさゝやいてゐるのを聞く、

おゝ恒星よ——おゝ墓場の草よ——おゝ不休の變移と進捗、

若しもお前が何ものかをいはなかつたら、如何して私が何ものかをいひ得ようぞ。

秋の森林の中に横はる濁つた溜り水について、

木がらし吹く夕暮の絶壁を下つて行く目について、

揺り動け、晝間と暮れ方との火花よ、——堆肥の中に朽ちてゆく黒い樹枝の上に揺り

動け、

冬枯れの梢のうめき悲しむ亂語にまで揺り動け。

私は月から高揚し、私は夜から高揚する、

私は蒼ざめた微光が反映された午後の日目だと思ひあてる、

而して偉大な或は劣弱な生れ子から堅固なものへと開展するのだ。

五〇

さういふものが私の裏にある——私はそれが何んであるかを知らない——然しそれが私の裏にあるのを知つてゐる。

ねぢあげられけみどろになり——而して私の肉體は穩やかにも靜かになる、私は眠る——私は永く眠る。

私はそれを知らない——それには名は無い——それは語られざる言葉である。それはいかなる字書にも言葉にも象徴の中にもない。

私を乗せて回旋する地球より以上の何物かをそれは回旋してゐる、

それにとつては創造は友達だ、その抱擁が私を眼ざましたのだ。

恐らく私は更らに語るのがいゝのだらう。輪廓圖よ！ 私は私の兄弟姉妹のために訴へる。

解つたかあなた方は、おゝ私の兄弟姉妹よ、

それは渾沌でもない死でもない——それは形體であり、統一であり、計畫である——それは永遠の命である——それは幸福である。

五一

過去と現在とは萎へる——私はそれらを満たし又虚ろにした、

而して未來なる次ぎの褶を充たしに行くだらう。

三九四

そこにゐる聞き手よ、何をあなたは私に打明けようとするのだ、
薄暮が近づくのを私は感じはじめたのだから、私の顔を見入れ、

(隠し立てせず語り——聞いてゐる人は外にはゐない、而して私はなほ一分だけと
どまつてゐるのだから)。

私は自己に矛盾してゐるか、

それでも結構だ、私は自己矛盾者だ、

(私は大きい——私は多を包含する)。

私は自分に近い人々の方に自分を集注する——私は戸口の石のところまで待つてゐる。

誰れが一日の勤勞を終へ、誰れが逸早く食事を済ませたか、

私と一緒に歩かうと望むのは誰れだ。

私が立ち去る前、あなたは私に語らないか、それとももう間に合はないのを思ひ知ら
うとするのか。

五二

まだら斑の鷹が私のそばを飛び翔りながら、私を責め詰る——彼れは私の無駄口と躊
躇とをつぶやき立てる。

三九五

私も亦少しだつて飼ひならされてはゐない——私も亦不可解な人間だ、
私は私の野蠻な叫びを世界の屋根の上から響かせるのだ。

晝の餘光が私のためにさすらひ残つてゐる。

その餘光は休らひに入つて後の私の姿繪を、何者にも増して正確に、蔭になりゆく曠
野の上に投げる、

その餘光は私を霧と夕闇とに誘ひこむ。

私は大氣の如くに姿を消す——私は私の白髪を馳せ去る太陽に向つてふり散らす、

私は自分の肉體を渦潮に溶かし込み、而してそれをレースのやうな破片にして漂はす。

私は私自身を塵にゆだねよう、而して私の愛する草となつて現はれ出よう、
あなたがまた私を求めたいとなら、あなたの靴の下を探すがいい。

あなたには私が何者であり如何するつもりだつたかど解るまい、
解らないでもいい、私はあなたのために健康を持ち來たさう、而してあなたの血を淨
めて力を與へよう。

一度私を捕へそこねたとて失望してはいけない、

こゝで尋ねあぐねたらかしこを尋ねて見るがいい、

私はあなたを待つて、必ずどこかにゐるのだから。

厳かにもやさしいオルガンのパイプよ、私はお前の音を聞いた

前の日曜日朝、寺を過ぎつた時、厳かにもやさしいオルガンのパイプよ、私はお前の音を聞いた、

秋の風よ——薄暮の森を彷徨した時、空高く、お前の悲しげな長いいぶきを私は聞いた。私はオペラで歌はれた完全な伊太利風なテノールを聞いた——四部合唱の中にソプラノの聲を聞いた。

……私の愛するもの、心臓よ——お前をも私は聞いた、私の頸に巻かれた腕を傳つてかすかにさゝやくお前を、

お前の鼓動を、凡てが静まりかへつた昨夜、私の耳もとに小さな鈴をふり鳴らすかと。

この合肥

最も安全だと思ふところにゐながら私の心は驚かされる、

私の愛する静かな林から私は身じろぎする、

私はもう散歩の足を放牧地には向けないだらう、

私の愛人なる大海とあひひきするために衣を私の肉體から解き放さうとはしないだらう、

他の肉に觸れて私の力を新たにする、さういふ気持ちで私の肉を大地と觸れ合はすこととはしないだらう。

大地が絶えて病まないとは一體どうしたことなのだ、

春毎に榮え出るものよ、お前は どうして生き／＼しいのだ、

菜草、菜根、果樹、禾穀の血よ、どうしてお前は健康を齎らすのだ、

人間はお前の衷に、絶えず腐爛した死骸をおしつけはしないのか、

凡ての陸地は酸敗した死によつてやむ時なく攻めつけられてはゐないのか、

彼等の亡骸をお前は何處に始末したのだ、

長い歲月の間に現はれ出たあの飲んだくれや大食ひの人々を、

かの凡ての汚れた飲料や食物をお前はどこに片付けたのだ、

今、お前の上にその一とひらをすら私は見出さない——それとも私はあざむかれてゐるのか、

私は自分の大掣をとつて畦間を掘るだらう——私は鋏をもつて草生え地を耕し、その土を覆へすだらう、

私は誓つて腐つた肉片の或るものをさらけ出すだらう。

二

見よこの合肥を、よくそれを見よ、

恐らくその各の部分は嘗て病めるものゝ部分をなしてゐたのだが——而かも見よ、

春には草が大曠野を被ふて茂り、

菜園に播かれた豆は音もなくその殻を破り出で、

繊細な葱の穂は空さまに鋭く延び、

林檎の蕾はその枝に鈴なりにほころび、

復活した麦はその墓から生青い顔色で現はれ、

生々の色が柳と桑との樹肌に眼ざめ、

雄鳥は朝となく暮となく歌ひさゞめき、而して雌鳥は巢につきはじめ、

庭鳥の雛は殻を破つて現はれ、

獸類の子も現はれる——犢は牝牛から生れいで、現は牝馬から、

小さな土の高まりからは、馬鈴薯の濃緑の葉がまめやかに生ひ立ち、

小さな土の高まりからは玉蜀黍の黄色な莖が生ひ立ち——ライラックは前庭に花さき、

夏の生氣は酸敗した死の凡ての層を越えて無邪氣にもまた誇りがだ。

何といふ魔術だらう、

あらゆる空氣の流れが毒氣を含んでゐないといふこと、

私に愛を迫るあの海の透명한緑の色彩がごまかしではないといふこと、

その海の舌で私の五體を隈もなく舐めさせても安全だといふこと、

その海の中に蓄積されてゐる疫病の害を私が被らないといふこと、

凡てのものがどこからどこまで清浄だといふこと、

井戸からの涼しい飲料の味が無類だといふこと、

黒きいちごがみづ／＼しく味よいこと、

林檎園の林檎、蜜柑園の蜜柑——瓜、葡萄、桃、杏のいづれもが私に毒でないといふこと、

私が草生に身をゆだねても更らに病にはかゝらぬといふこと、

而かもその草の葉々々は、嘗て傳染力の強い病氣であつたところのものから生ひ出て來たのに。

三

私はこの大地におびえ驚くばかりだ、それは沈着で忍耐強い、

それはかくばかりの腐敗の中から、かくばかりの香はしいものを生ひ立たす、

無数の病死體に攻められながら、些かの被害もなく、不壞にその軸のまはりに廻轉する、

かくばかり浸み徹つた毒氣の中から、かくばかり素晴らしい空氣をしほり出す、

かくばかり何事も知らぬげに、それは年ごとに宏大もない潤澤な收穫を新たにす、

それは人間にかくばかり神聖な材料を恵み與へる、而して最後に人間からのかくばかりなかたみを平氣で受け入れる。

おもひ

服従、信頼、結合について、

高きに立つて私が眺めわたす時、人間の大きな群れが、人間といふものを信じない人々の指導に従つて行くのを見るのは痛ましきの限りだ。

美女

四〇六

女、座つた女、歩きまはる女——或るものは若い、或るものは若い。
若いのは美しい——然し老いたのは若いのよりも更らに美しい。

今、生の盛りに

今、生の盛りに、健やかに、人眼に觸れて、
わが合衆國の第八十三年、四十歳なる私は、
一世紀の後、或は數十世紀の後、
まだ生れ出ぬあなたを求めてこれらの詩を。

あなたがこれらの詩を読む時、人眼に觸れてゐた私は人眼から隠れ去るのだ。
今、あなたこそは健やかに、人眼に觸れて、私の詩を實現し私を尋ね求める、
若し私があなたと一緒にゐて、あなたの仲間となつたら、いかに幸ひだらうと空想し
ながら。

四〇七

私はあなたと一緒にゐるのだ、さうお思ひ（私があなたと一緒にゐるのは、恐らく十分に確かなことだから）。

屢、ひそかに私の近づくあなたよ

おゝあなたよ、屢、ひそやかに、あなたのゐるところに私は近づく、あなたと一緒にゐたいために、

私があなたの傍らにあつて歩む時、あるは側近く座を占める時、あるは部屋を同じくしてゐる時、

人知れぬ電火があなたのために私の衷に閃いてゐるのをあなたはよも知るまい。

時たま私の愛するものに對して

四一〇

時たま私の愛するものに對して、私は憤りに満たされる、私は報はれない愛を浪費してゐるのではないかと思ふから、

然し今私は思ふ、世に報はれない愛はない——かうかあゝか兎に角返報はたしかだ。

(私は一人の人を心から愛した、而して私の愛は報はれなかつた、

然しそれあるがために、私はこれらの詩をば書き得たのだ)。

私に似た大地

私に似た大地、

お前はいかにも無感情に、飽き足りて圓味を持つて見えるが、

今私はそれがお前の凡てだとは思はない、

私は今推測する、お前には何か激烈なものがあつて、何時爆發するかも分らない。

何故なら一人の勇者が私に牽きつけられ——而して私が彼れに牽きつけられたから。

然し彼れに對して、私の心には何か激烈な恐ろしいものがあつて、いつ爆發するかも

わからない、

私はそれを言葉で表現するのを敢てし得ない——この詩の中にも敢てし得ない。

四一一

博名を知り得た時

四二二

英雄が高名を博したのを知り、偉大なる將軍の戦勝を知り得た時、私はその將軍を羨む心はなかつた、

大統領がその椅子にあるのも、富豪がその大厦にあるのも、私は羨む心がなかつた。然し愛する人達の友情について聞いた時、その友情がどんなものであつたか、生涯の間、艱難と誹謗との中に、長く／＼變ることなく、

青年期にも、中年期にも、老年期にも、如何に彼等が貞節であり、愛情に満ち忠實であつたかを聞いた時、

その時私は考へこんでしまう——私は苦々しい羨望の念に満たされて、急いでそこを立去つてゆく。

私達二人の若者は互ひに相寄りながら

私達二人の若者は互ひに相寄りながら、

一人は他を決して見捨てることなく、

大道の上を遍ねく逍遙し——南と北とに散策を擅まゝにし、

力を楽しみ、——肘を延ばし——指を噛み合せ、

不敵に武装し——食ひ、飲み、眠り、愛し、

私達自身の律での外の律てを顧みず——航海しつゝ、戦闘しつゝ、掠奪しつゝ、強迫しつゝ、

守銭奴と、卑僕と、僧侶とを脅かし——大氣を呼吸し、淨水を飲み、草原の上、海岸のほとりに舞踏し、

四二三

町々を侵略し、安佚を輕蔑し、法令を愚弄し、弱さを追ひ退け、
私達の入寇を完ふするのだ。

私は愛欲にもだえるその人だ

私は愛欲にもだえるその人だ、

大地は相率かぬか、あらゆるものはもだえつゝ、あらゆるものと相率かぬか、
それだから私の肉體も、凡ての逢ひ得たもの、凡ての知り得たものと。

女の歌手に

四一六

さあこの贈物をお受け、

私はこれを或る英雄、或る雄辯家、或る司令官のために蓄へてゐた、

古來の大義のために、民衆の進歩と自由とのために、私の魂の事業のために働いてくれる人にと蓄へてゐた、

然し今私は自分の蓄へてゐたものが、誰れにも劣ることなくあなたに属するものだと私は知つたのだ。

一人の弟子に

改造が要望せられるか、而してそれがあなたによつてなされるのか、

改造が宏大なものであればあるほど、それを成就するためのあなたの個性も宏大でなければならぬ。

あなたよ、兩眼、血液、清らかに香ばしい皮膚がどれほど役に立つかを考へないか、

あなたが群衆の中に歩み入るとき、欲求と支配との空氣があなたと共にしみ入り、誰れもがあなたの個性によつて印象を受ける、そのやうな肉體と魂を持つといふことが、どれ程役に立つかを考へないか。

おゝ磁力、どこまでも肉、

四一七

行け、私の愛するもの、若し要せらるゝなら餘事を抛つて、この日この時、剛氣、眞

實、自敬、決斷、致持にあなたを養へ、

あなたの個性を堅固に打ち建てるまで休むな。

臨終の人に

あなたへの使命を果たすために、他の凡ての人の中からあなただけを選び上げる、

あなたは今死ぬのだ——他の人々は何んどでもいへ、私はいひ紛らすことは出来な

い。

私はありのまゝで容赦がないのだ、然し私はあなたを愛する——あなたはもう遁れる術がない。

やさしく私は右の手をあなたの上におく——あなたはかすかにそれを感じるだらう、

私はつべこべ云はない——私は自分の頭をかしげ近づける、而して半ばそれをつゝむ。

私は静かに坐る。——私はどこまでも忠實である。

私は看護人以上、親以上だ、隣人以上だ、

永生を持つた靈肉の上に於て、あなた自身であるものゝほかの凡てから私はあなたを自由にする、あなたは必ず遁れ出るだらう、だから、

あなたがあとに残してゆく遺骸は、謂はゞ排泄物に過ぎないだらう。

思ひ設けぬところから太陽が輝き入る、

強い思ひと自信とがあなたに満ちる——あなたは微笑んでゐる、

私があるの病氣なのを忘れてゐるやうに、あなたは自分の病氣なのを忘れる、

あなたは藥劑を顧みない——あなたは歎き泣く友等を意としない——私があるの傍らにゐるからだ、

私はあなたから他の凡ての人を遠ざける——もう悲しまるべき何ものもない、

私は悲しまない——私はあなたを祝福する。

母と嬰兒

その母の胸に巢喰つて眠つてゐる嬰兒を私は見る、
眠れる母とその嬰兒——氣息をひそめて、私は永く／＼二人に見入る。

走者

まっ平らな道路の上を熟練した走者が走る、
彼れは瘦せがたで、筋骨が逞しく、肉づきのいゝ脚を持つ、
彼れは輕衣に身づくろひし——走るにあたつて前かしぎとなる、
拳を軽く握りながら、肘を少し胴から離して。

忍耐強いしづかな蜘蛛

四二四

忍耐強いしづかな蜘蛛、

それがひとり、小さな突角にうづくまり、

身のまはりの大きな空間をはかりしらべ、

体内から絲、絲、また絲をくり出し、

絶えず延べほごし——絶えず休まずひろげてゆくのを私は見る。

而して汝、おゝわが魂よ、汝の立つところ、

無邊際の空間に取りまかれ、取りまかれながら、

絶えず考慮し、冒險し、突進し、——諸ろの世界を尋ねてそれを結びつけ、

遂に汝の欲する橋を架け——遂にしなやかな錨をおろし、

遂に汝の投げるいと細き絲で、いつこかを、おゝわが魂よ、たしかに引捕へるよ。

四二五

牢獄の中の歌手

四二六

「おゝ恥ぢ、なやみ、かなしみの身の様

おゝ空恐ろしいおもひ——捕はれの生魂」

牢獄の廣間づたひにこの復唱が響きわたつた、

屋根——上天の頂きにまでそれは高まつた、

そこでは嘗て聞かれなかつた物思はしげにもやさしく強いメロデーとなつて漫々とた

だよひながら、

遠きに立つ監哨、武装せる監守にも歌は達してその歩みをとどめながら、

感激と畏れとをもて聴く人皆の血行を押へつけながら、

二

「おゝあはれさ、暗らさ、かなしみの身の様

おゝ許るせよわれを、幸薄き生魂」

ある冬の日、陽は西に低く傾いてゐたその時、狭い廊下を、その國の偷盜と流賊との
間を、

(そこには何百人となく、しほれ顔の殺人者と、悪さかしい質造者とが、

牢獄の中の日曜の會堂に集つてゐた——その周圍には監守が大勢、十分武装して、物

物しい眼で警戒しながら)

それは凡て暗らく腐敗した腫疱、國民の中の犯罪者の集團、

その間を、一人の「女性」が靜かに落着いて、兩手に一人づゝの無邪氣な幼な子を抱き

四二七

ながら歩んで来た、
 而して講壇の上、おのれの側なる腰かけに幼な子を坐らせて、
 彼女は先づ樂器もて音律的な低い前奏曲を奏し、
 やがて世に類ひない聲を揚げて、
 古雅な聖歌を歌ひはじめた。

三

聖歌

「牢屋の中にこめられた一つの魂が、
 叫ぶ、助けよ、おゝ助けよ、而して彼女の雙手をふり動かすが、
 その眼はとさされ——その胸は血ばしるも、

ゆるしは來らず、やすらひのなだめも、

おゝ恥ぢ、なやみ、かなしみの身の様、

おゝ空おそろしいおもひ、——捕はれの生魂」

ひまなく彼女の歩む歩み、

おゝ日毎の悶え、夜毎の悩み、あらず、親しましい手、あらず、友の面わ、やさしい
 心も、ゆるしの聲もなくて。

「おゝあはれさ、暗らさ、かなしさの身の様、

おゝゆるせよわれを、幸薄き生魂、

この身ではない、罪を犯したのは、

あさはかなこの肉の體が破滅の首輪、
雄々しく長くさへはしたものの、
肉には勝ち得ぬこの身は弱いもの。

おゝ命、命はない、かなしみが苦しい、

おゝ打敗れて、無視されて燃える魂

(なつかしい牢獄の中の魂よ、堪へ忍べ、

暫らく——やがていつかはゆるしが近づく、

あなたを自由にし、あなたを家に歸らせるために、

神々しいゆるし手、「死」があなたに、

もう囚はれの身ではない——恥ぢもない、かなしみもない、
去り行け、神に自由を許された一つの魂)

四

歌手はもだした。

おだやかに澄んだその眼が、上向きになった凡ての顔の上にかどやいた、

不思議な牢獄の中の顔の海——さまざまに異つた顔、悪ざかしい顔、殘虐な顔、刀痕
のある顔、美しい顔、

かくて女性は立ち上り、狭い廊下を、人々の間を過ぎ去つた、

その上衣は沈黙の中にさやくと鳴つて人々に軽く觸れながら、

彼女は幼な子達と共におぼろ闇に消えて行つた。

五

囚人の上にも、武装した看守の上にも、彼等凡てが身動きをはじめる前に、

(囚人は牢獄を忘れ、看守は弾ごめした短銃を)沈黙と静止との不思議な瞬間が来た、

深い、半ば押しつぶしたすゝり泣き、涙にまで動かされて面を伏せた悪人の聲、

若者のせはしい呼吸と共に、故屋の記憶、

子守歌を歌ふ母の聲、姉妹の心くばり、幸福な幼年時代、

長く閉ちこめられてゐた心はそれらの思ひ出にゆるぎ立つた、

——不思議な瞬間だ——けれどもその後、淋しい夜、多くの人に、そこにあつた多く

の人に永年の後——臨終の際にも——悲しい復唱——その調子、その聲、その言葉

が、

再び歌はれる——いつくしく落着いた「女性」は狭い廊下を歩み、

又も泣くやうなメロデーを牢獄の中の歌手は歌ふのだ、

「おゝ恥ぢ、なやみ、かなしみの身の様、

おゝ空恐ろしいおもひ、——捕はれの生魂」

ワルト・ホキットマン

私は彼れを一個のローファー (Lodger) だと呼んだことがある。然しこれは勿論私の造語ではない。一八四〇年十一月の「ロングアイランド・デモクラット」に彼れはローファーを讃美する一文を掲げてゐる。「どれ程私はローファーを愛してゐるか。あらゆる人類の中で、かの純真な、生得不變のローファーに比べ得るものを見ない」「私に汝の落着き拂つた、堅實な懶惰の子を與へよ」。世間一般のローファーに對する侮蔑を見返すために、ローファーが相集つて一國を創立する空想をも彼れは描いてゐる。成熟の晩かつた彼れが二十九の年に書いたその一文には、宗教的な匂ひさへ漂ふほど感傷的ではあるが、その背後には彼れの本質が輝いてゐる。「私がローファーと呼ぶのは何か。

ローファーといへばローファーだ」。さうもいつてゐる。ローファーとは怠けものゝことだ。約束の出来ない人間、誓ふことをしない人間だ。主義と節度とを所有しない人間だ。彼れは働き甲斐のある人々から齒痒ゆがられる。彼れは自分の欲することしかない。外から強ひられることを極端に厭ふ。彼れは國家社會の建設に與らない。けれどもファナティックの外には誰れもが彼れを憎み得ないだらう。而して彼れは何事もなさなかつたか。人類の生活が始つて以來、人貌を有する他の動物としてのみ存続したか。或はさうかも知れない。さうならば自然は殊の外寛大だ。

彼れといふのはワルト・ホキットマンのことだ。

彼れは十三の時以後學校なるものゝ門をくゞらなかつた。それは彼れにはいゝことだつた。十五の時に肉體的には既に十分に成熟して一人の大人を思はせたが、その心は秘藏の寶玉のやうに容易に大氣に曝らされなかつた。彼れは唯吸收することだけを

知つてゐたやうに見える。而かもそれは初めは都會を吸収せず元始的な自然を好んで吸収したのだ。彼れはロング・アイランドの海沿ひや田園をその唯一の伴侶として、草木の如く自然に育つた。彼れの性格の基本的基礎はそこに大根を張つたのだ。後年彼れはいかに種々なる人間生活の諸相に當面したらう。而かもそれを表現する彼れの言葉の後ろには、大自然の中に悠遊するパンの懶惰な姿が滲み出る。結局太陽の光と離れ住むことの出来ない自然、結局自分の制約以外のものには絶えず反抗して倦むことのない自然、黙つて憎み叫んで愛する自然、それ自身以外には誰れにも本當に理解され得ない自然、それが死に至るまで彼れの基調をなしてゐた。

「今のこの時から、自由！

今のこの時から私は制約や、空想的な境界線から自らを解放することを命ずる、どこに行かうと、私は全然的に絶對的に私自身の主、

他人にも耳傾け、そのいふところをよく思ひめぐらし、

立寄り、探り求め、受け入れ、熟慮しはするが、

しとやかに、然し拒み難い意志を以て、私は私を捕へんとする桎梏から私自身を奪

ひかへすのだ」

さうだ。彼れは常に自分を自分自身にまで奪ひかへす男だつた。それにも拘らず、彼れは常に詩人たる自分から離れてさまよひ出ようとした。新聞記者として立身しようといふ欲望は可なり強く、又講演者として生活しようとしたこともあつた。小學校の教員となつたのは恐らく彼れの貧困がさせた業だらう。教師としての彼れは「決して失敗ではなかつたが、斷じて成功ではなかつた」。新聞記者としても、講演者としても、要せられたる思慮の慧敏と才智とを所有してゐなかつた。彼れの心の水の比重は極めて重い。そこに投ぜられた事象は長い時間を経なければその底には達し得なかつた。

彼れはまた政客たらんと企てたこともあつた。タムマニー・ホールの爲めに畫策して、ブルックリンに於ける政争の或る重要な役目を演じようとしたこともあつた。けれどもそれらの凡ての目論見は幸ひにして彼れの傾向とそりを合はさなかつた。唯かゝる彼れの徒弟生活に於て、彼れに著しく役立つものは都會の生活にもぐり込んだことだつた。

近代の都會、それはエジプトに金字塔があり、希臘にアテネの殿堂があるやうなものではないか。私達の文明が他の文明によつて置きかへられる時代は遠からざる未來に来るだらう。私達の文明が一つの廢墟になつた時、奇異な傳説となつて残るものは近代的都會の追憶ではなからうか。そこに行はれた施設と生活、その生活の歡びと悲しみ、及びそれが反映する特殊な餘光は、誰れかによつて完全に嚙下せらるべきだつた。果して都會の歌手は數多く輩出した。けれども、昔の宮廷の詩人が田園を見て歌

つたと同様の空想で、都會を歌ふのを恥ぢた人が幾人あつたらうか。或るものはその美のみを讚美したかも知れない。或るものはその醜ばかりを呪詛したかも知れない。然しながら都會をその全體に於て掌握したものゝ數は決して多いといふことが出来ないだらう。ホキットマンは少くも、古い意味の都會から私達の都會に移住することの出来た一人だつた。彼れは自然に投入すると同じ熱意と度胸とを以て都會の生活にまぎれ込んだ。渡船の上、乗合馬車の中、教會、社交俱樂部、劇場、オペラ・ハウス、酒場、孤兒院、監獄、法廷、公衆浴場、博覽會、講演、音樂、……都會的大火事……「どこであれ、人間の生活が絶大な塊りになつて動きつゝあるところには、必ず彼れがゐてそれを感じ且つ吸収してゐた」。彼れは都會に於ても *de vino avevange* (神々しい平民) がいかに彼等自身をその特殊な生活に適合させてゐるかを見たのだ。

彼れが田園にあつて活きたのは十七から二十二まで、ニュー・ヨークとブルックリン

とにゐて都會に接したのが二十二から二十九まで。

彼れは或る時はフロコートを着、トップ・ハットを被り、胸に花をつけて細身の杖を携へることを忘れなかつた。然しそれは、彼れが直ちに自分で發見した如く、彼れには不似合ひだつた。彼れが心を許して接し得るのは *Powerful uneducated Persons* だつた。渡船の水夫の誰れ彼れ、乗合馬車の御者の誰れ彼れ、その名は死前の彼れの記憶にも膠着して離れなかつた。

遺存してゐる文書によれば、彼れは十九の年頃より詩を發表し始めたやうに見える。彼れのそれらの詩中に現はれる姿は感傷的で悵鬱だつた。それは凡ての青年にあり勝ちのものだらう。生に對する何とはなき不安、死に對する靡ろげな憧れ、やりどころなき愛の悶え。

「凡ては互ひの苦を持つてゐる、老年は死をおそれる、

青春のなやみは誇りと欲念、

而して心の痛み、その胸の中には、

熱高き情炎」

さういつた傾きのものだ。死も亦彼れの詩題にふさはしかつた。西行法師と同様に彼
れは死を人なき自然の一隅に選んだ。

「誇りがにも華やかなる堂にありて、

悲しみの涙、友の歎きにかこまれつゝ、

われは、終りの時せまりて、

このうつそ身をかいはるを恥づ。

.....

日の目まさに閉ぢなん頃

こひ願はくばわが死の床

擔ひ出だせよ空の清きところ

草香ひ茂り木むら嚴かに震ふそこ。

休らひのしどま心をやはらげ

見上ぐるにいや高き木末は

草生の土によき影をなげ

涼しくあらんそこにわれは。

.....

われは人の近きにあるを願はず、

されど日の光の沈みゆくかはたれ

このうつし世に別れを告げて、かならず

よみぢにいなん——たゞひとりわれ」

かゝる詩は彼れの心の聲ではない。凡ての青年がその捕へ得ざる幻影の上に築き上げる蜃氣樓だ。

而して彼れは二十九の年まで恐らく戀を知る機會を持たなかつた。戀といふ煉金術は彼れを更らに早く詩人にしてゐたかも知れなかつた。あの雄々しい強健な體軀と、徐ろにはあるけれども心の奥底にまで感じこむ熱情とは、彼れを一人の戀人にさすには十分であつたらう。唯彼れは貧しかつた。父業の建築請負ひで生計を立てゝゐた。而して自分自身を見出さなかつた彼れは、人に對して不必要に臆病だつたやうに見える。

「幸薄きわが愛欲はまだ見ぬ人にこがれ寄る」と悲しく歌ひながら、まだ見ぬ人を見

窮めようとはしなかつた。同時に愛欲の鎖はローファーなる彼れには重過ぎたかも知れない。戀愛はやがて生涯を繫縛して解放しない家庭生活を豫想する。この豫想は彼れにとつては由々しい警戒であつたらう。それ故に彼れは不思議な空隙を胸に感じつゝ、美しい夢を冥想の中に描くのを選んだかも知れない。彼れはその代り同性の交誼に對する熱烈な實行者であり讚美者であつた。「カラムス」篇一篇は實にこの男らしい熱情の衝搏の記念碑である。「Camerado」と彼れは同性の友に呼びかけた。あの言葉の意味と響きとは特異だ。あの一語の中に新しい友情の定義が藏されてゐる。これに反して彼れの戀愛歌のいかに非人格的であるよ。彼れはその「アダムの子等」に於て戀愛の赤裸々なる當體を披瀝した。ニュー・ヨークの生活に於て、彼れは公娼制度が如何なる慘害を人間の生活に及ぼすかを見て、賣娼制度取締りのために叫んだ。かゝる事實が或は彼れをして性欲詩を敢てせしめた動機になつたのではないだらうか。彼れ

は健全なる性交のみが人類の未來に正しい約束をなすものであり、従つてそれを高調するのには當然であるのみならず當爲でなければならぬと感じたらう。然しその詩篇にすら、二三のものを除く外には、極めて抽象的な表現を求め得るに過ぎない。

生れてから二十九年の清潔な徒弟生活、それは彼れのやうな境地にあるものに取つては、寧ろ珍らしい生活であつたといつていい。彼れは三十にして頭髮が既に白くなつたけれども、その心臓は小皺一つなく張り切つてゐた。而して南方ニュー・オルレアンス市からの招致を受けてクレ・セント紙の記者となる爲めに一人の弟を伴つて南に下つた。

彼れは元來奴隸廢止運動の熱情家だつた。彼れの詩 "Blood-Money" はこの熱情を紙面にたくきつけてある。南方は奴隸制度擁護の本陣だ。そこで彼れが如何なる程度に自分の主張を徹底したかそれは知られてゐない。然し恐らく彼れを最も牽きつけた

ものは、その溫暖な氣候と南歐の血を多量に交へた人々の生活とだつたらう。彼れの太陽、少年時代ロング・アイランドの空に仰いで、その胸の中に深く吸ひこんだ太陽の光が、内外から彼れを擽りはじめたのだ。恥づかしげに眉をしかめて、手持無沙汰らしくあたりを見まはす彼れの可憐な姿が私の眼には映る。彼れは三月に行つた。而して突然五月にそこを去り、中部諸州を旅行して北部に歸つた。彼れは固より借金を綺麗にするための出稼ぎにそこに行つただけけれども、その退去のあまりに速急だつたのには謂れがなければならぬ。

恐らくこゝで彼れは始めて戀を知つたのだ。彼れの晩年のカムデンの生活に於て、屢トラウベルにその時代の生活の告白をなす約束をしたにもかゝらず、遂にそれを果さなかつた。或る傳記者のいふところによれば、その躊躇は彼れ自身の爲めではなく、對者に個人的の累を及ぼさんことを恐れたものらしい。それ故彼れの情人は既婚の

婦人だつたらうと想像されてゐる。彼れはたゞ探りよることの出来ない暗示として次ぎの言葉をサイモンズに告げてゐる。

「若き壯年時代、中年時代、南方に住んでゐた頃の私の生活は、おもしろおかしく肉体的なものであつて、疑ひもなく世の批難を受くべきものだつた。結婚はしなかつたが、六人の子を擧げた。——二人は死んだ——南部に生活してゐる一人の孫は、時折私に手紙をよこす——或る事情（それは彼等の財産と利益とに關係してゐる）の爲めに、二人は親しい間柄であることが出来ないでゐる」

けれども彼れの詩集の全部を通じて、父親としての彼れの喜びと歎きとは全く窺ふことが出来ない。彼れはそれ程自分を晦ますことの出来る詩人だつたらうか。それ故に又或る傳記者は、六人の子を擧げたといふ彼れの告白を不思議な詩人のハルシネーションの一つに考へようともしてゐる。

三ヶ月にして突然そこを去つた彼れには、痛ましい事情が潜在してゐたのではなかつたか。「揺り動きやまぬ搖籃から」を讀むものは、そこに迸り出た激越な感傷の裏に或る手蔓を見出し得ないであらうか。

詩人が戀の味を知るのは虎の子が血の味を知つたに等しい。彼れが再びニュー・ヨークに歸つて新聞記者と建築請負との業務に従事するに至つた後、その本然の氣稟ははじめて萌え出ではじめた。彼れの表現は在來の舊套を脱してはじめて彼れ自身のものとなつて來た。三十四歳の時、彼れはその手帳の中にかう書いてゐる。

「その大望といふのは、文學的な若くは詩的な形式によつて、妥協することなく、私自身の肉體的、感情的、道德的、理智的並びに詩的な個性を忠實に言葉に表現しようといふことだ——この年代、この土地にあつて、特殊な個性を、今までの如何なる詩人よりも、如何なる書物よりも、更らに確實で普遍的な意味に於て探究しようとい

この言葉は一つの立派な宣言である。彼れはその中に近代人たる彼自身を的確に擷んでゐる。彼れは永遠の爲めに書かうとはしなかつた。彼れは永遠を書かうとはしなかつた。彼れは第十九世紀の亞米利加に生れ、彼れにのみ許されたる生活環境にある彼れ自身を赤裸々に表現することを唯一の心がけとした。彼れは時代と場所との如何なる接會點にもしつくりあてはまり得る彼れを創立しようとするよりも、定められたる環境にあつて、思ふ存分に育ち上り、その育ち上つた自分を誰れもが表現し得ないやうに的確に、特殊に、諛偽りなく表現しようとしたのだ。而してその決心の關する範圍に於て遺憾なく成就したのだ。それ故に彼れはコスモポリタンであると同時に地方的であり、超越的であると同時に僻見的であり、人であると同時に擬ふ方なき一個のホキットマンだ。彼れは遂に理想主義の幽靈たることから彼れ自身を救つた。概

念の奴隸たることから彼れ自身を解放した。人々は恐らくこの詩人の地方的であり僻見的であり餘りにホキットマンであるのに蹉くかも知れない。然し私は彼れのこの明らかな標示にその詩の特徴を見る。それは無限の天空を背景とした一つの星座の莊嚴と微妙とを聯想させる。彼れの傍らにあつては、バイロンもシェレーも、ブレイクさへもが影薄き理想の燐光に過ぎない。

一八五五年彼れの三十六歳は彼れに取つても文學そのものに取つても忘れ得べからぬ年であつた。不思議な、これといつて何を仕でかしたともない、家族のものにも依體のわからなかつた、大男のローファーはこの年に十二の詩を収めた九十四頁の小詩集を世に提供した。「草の葉」(Leaves of Grass)がそれである。ポーマノックの汀沿ひに、ブルックリンの喧騒の中に、南方及び西方諸州の放浪の旅の中に、彼れが蓄へ來たつた一見無統一な平凡な生活及びそれに對する特殊な整頓法と省察、その詮じつま

つたものがこの詩集だつた。彼れはその當時亞米利加人に、彼等の用ひなれた言葉と、彼等に本質的なリズムと、彼等を裏書きする感情とを以て話しかけたのであつたけれども、それは恐らく彼等に取つて餘りに近か過ぎたのであらう。彼等にはそれが彼等の詩であることが判らなかつた。彼等はやはり、前時代の言葉が彼等の詩だと思ひこんでゐたらしく見える。詩集は讀者を得なかつたのみならず、侮蔑を以て報ひられた。

然し彼れはそれを恐れなかつたやうに見える。何故なら彼れは彼れの見出した道が唯一の道であることを明らかに感知してゐたから。而して彼れは神經衰弱者のやうに喋急ではなかつたから。彼れはもう堂々と歩く。彼れは凡ての人に好意を持つ。彼れは何物にも拘束されないローファアの自由を以て、彼れの時代の信仰の開基であるのを知り抜いてゐた。七十に垂んとして彼れの書いた回想は、實にその當時の彼れの心だ

つたらう。

「私は温和な推賞の言葉も、大きな金銭上の報酬も、或は現存の流派や習俗の承認をも期待してはゐなかつた。成就か半成か知らないが、私の仕事の全體に對する慰藉となるものは、私の衷にある魂以外の影響に少しも累はされることなく、私らしく私の云はんとすることを云ひ盡し、而してそれを見當ちがひをせず書き記した點にある。——その價值如何は時が定めるだらう」

「詩としての『草の葉』の背景に私は習俗的な主題の凡てを拒んだ。持ち合せの修飾はしなかつた。戀と戦との取つときの構想、舊世界の詩に現はれる稀代の人物、そんなものはない。云ひ得べくんば、單に美化のためにしたといふやうなものも更らがない——傳説、神話、ロマンス、麗句、韻律、そんなものはない。然しながら新たに成熟しつゝある十九世紀の人類生活の普遍的なそれ、而して殊に、現在の合

これであつたのだ。彼れはかゝる主題が他國人によつて無視せられ、他の時代によつて棄却せられるのを願ふ暇がなかつた。そこに云ひ得べくんば彼れの弱點はある。然しそこに云ひ得べくんば彼れの力はある。彼れは明らかに一つの時代と一個の人間とを時間と空間との交叉點に浮彫りにしたのだ。

仕事場を持つた彼れは本當の生活らしい生活にはいつて行つた。生活に實驗的といふことがあつてはならぬ。そこからは本當は何ものも生れては來ない。然しながら從來の彼れの生活は、結果に於て、實驗的といふことが出來ないとするなら少くとも經驗的であつた。彼れの意識の中には、何ものにか役立たせるために生活を導くといふやうなところが無いではなかつたらう。大きな意味の徒弟生活は彼れの何所かに膠着してゐたやうに見える。然しながら彼れは今生活そのものには入り込んだ。生活には

入り込むこと、それは如何に難事であるよ。凡ての技術に於て女人となるのはまだ達し易い。然しながら生活に於て女人となるのは生死を賭しての冒險である。動ともずるとミイラ採りがミイラになるべき危険な境地だ。そこには十分の智慧と決意と果斷とが要望される。多くの人はそこには入り込むと同時に自分自身を見失つてしまふ。況んや生活の女人となつて而かも清淨な素人の美點を失はぬこと、それは妻となつて處女性を死ぬまで失はぬ女性の稀れなるが如く稀れだ。彼れは然しかゝる離れ業の名人だつた。彼れは結局本質的なローファーだつたのだ。四十二の時、彼れはかう書きつけて自分に云ひ聞かせた。

「この日、この時、私は純潔で、完全で、おだやかな血液を持つた雄々しい肉體の所有者であるべく決心した。水と純粹の牛乳の外は凡ての飲料を避け、凡ての油氣の多い肉や晩い夜食を禁ずることによつて、淨化され、聖別され、精神化され、力

づけられた肉體を……四月十六日」

四五六

肉體からはじめてその陣容をととのへた彼はやはり彼れらしいと私は思ふ。それによつて私は彼れの心臓の武者ぶるひを感じる事が出来る。

彼れの生涯が人知れずかゝる曲折を描いて廻旋する間に、その祖國は彼れに無上の舞臺を提供した。米國は世界の環視の中に一つの飛躍をなすべく餘儀なくされたのだ。如何なる經濟的事情がその背後にあつたにせよ、彼女は人類的正義を意識して解剖刀を自分の横腹の腫物に擬せねばならなくなつた。リンカーンはその主治醫として選ばれた。北方の人道主義者達が叫んでやまなかつた奴隸廢止の實行が戰爭の形に於て結果されたのだ。米國は最後の結合をなすために先づ分離しなければならなかつた。彼れは戰爭に参加した弟の負傷を聞いて、萬事を放擲して南方に向つたが、一度戰爭の悲慘を見るや更らに萬事を放擲して傷病者の看護に従事した。彼れはそこに母

であり、兄であり、友であつた。そのゆるやかな粗野な親切は暗らい病院の寢臺の列の上に日光の如く暖かつた。彼れも亦暖められた。彼れの看護生活は二十ヶ月の長きに亙り、六百度病院を訪れ、八萬から十萬の間に達する傷病兵に接したのだ。而してさすがに健全無比だつたその肉體も打撃を受けて一部分の不隨を起すに至つた。

ワシントンに於て彼れはオ・コンナー、ポロース其他の知己を得てゐたため、内務省附きの書記に採用されて、兎に角定収入を得ることが出来た。それは彼れに取つての一つの安全な繫船だつた。役所のストーフと燈火とを利用して夜晩くまで讀書し得る樂しさを、如何に自慢らしく彼れはその母に書き送つたか。オ・コンナー夫婦も彼れにとつてはよきサマリヤ人であつて、彼れはその家に寄寓して楽しい朝夕を過ごすことが出来た。彼れがビーター・ドイルと知つたのもこの頃のことであらう。或る日ポロースを訪れた歸りの電車は夜になつて雨だつた。彼れは客といつては自分一人だ

四五七

けの電車の中で、車掌をしてゐたこの男と近付きになつたのだ。ドイルは南軍の兵士で負傷して捕虜になつたアイルランド人だつた。ドイルは無學で詩などは勿論解らない男だつたらしい。けれどもその暖かい質朴な心臓は直ちに彼れを引きつけてしまつたらしい。彼れは死にまでドイルをベイト／＼といつていつくしんだ。

この上なく平和な彼れは「草の葉」の著者であるために内務省から罷免された。オ・コンナーがその事實に憤激して彼れのために辯護の評傳を書いた。彼れに對するまごまつた辯護の聲は恐らくこれを以て嚆矢とするだらう。彼れはまた友人の世話で大藏省に職を得た。得なければならなかつた程彼れの詩集は賣れなかつたのだ。

彼れの四十七の時彼れの親愛的なるリンカーンは戦亂の凡ての血を負ふて犠羊の如く屠られた。而してその屍の上に新らしい米國の生活は建設せられはじめた。彼れはそれらの凡ての印象を「鼓聲」(Drum-beats)と「自選日記」(Specimen-days in America)

とに傾注した。果して奴隸廢止が戦争によつて遂げられるかを彼れは迷つたことがあつたが、而して南軍の威勢は一時彼れを迷はせるに十分であつたが、遂に北軍の勝利が達成せられるに及んで、彼れは流血の償ひが辛うじて遂げられたのを感じずにはゐられなかつた。彼れは確かに或る昂奮にあつた。彼れは聲を大にして世界の歡びの爲めに叫んだ。

然しながら彼れのかゝる昂奮の蔭には、彼れ一身に取つての悲劇が人知れず演ぜられてゐたのだ。オ・コンナー夫人の回想記によれば、彼れが四十五年(即ち一部のの不隨性に襲はれた年)、彼れは一人の女性を知つた。而してその女性が彼れに與へた友情的な手紙が、不圖その良人の手に落ちた。良人は憤怒と嫉妬から衆人稠座の中でホキットマンを詰責した。その女性に對して愛敬を感じてゐたホキットマンは、この事實があつて後深く彼女に同情した。彼れはこの事件をオ・コンナー夫人に告げて「若

し彼女が妻でなかつたならば立ろに彼女と結婚するだらう」といつた位だつた。「アダムの子等」の中にある「群衆——その海原のさかまく波間から」(第一卷参照)なる詩はこの女性にあてゝ彼れの歌つたものと考へられてゐる。

彼れはこの「白哲で鶯色の眼と髪毛とを持ち、やさしく柔和な、いかにも女らしい小肥りな女性」に對して、長い間心の中に深い苦悶を味つたやうに見える。その爲めに彼れは己れの愛着的な性情を咀ひさへもした。この苦惱は多分彼れの四十九の頃まで持ち續けたらしい。その頃の手記、

「謹つばちな子供じみた自己僞瞞、實際對者には存在せず、自分にばかり存在してゐたものを空想し、悉く自己に溺れて僞瞞を重ねたこと、而してその私の弱點——私の最大の弱點、缺點を注意せよ。けれども常に16 (こゝにはP字が記されてそれが抹殺されてこの數字に取り代へられてゐる) に對しては親しみの氣持ちと態度とを

持て。然しもう彼女を追ふな」

「冷靜な、溫和な、(感情を表はすよりは)變りのない態度——貧しい人に與へよ——誰れにでも合力せよ——犯罪者と愚かなものと卑しい人々全體に對して寛大であれ——然し少しく語れ——言ひ譯けをするな——祕密を漏らすな——洒落をいつたり、言葉に綾をかけたりするな。或は諷刺的な挿話をするな。(普通の場合には)論争せず、理屈をいふな」

「七月十七日

何んとしてもかんとしても私自身(と私の動靜)をこの不斷の絶大な(而して絶大な)動亂から引き放すのは大切なことだ」

「今、この時からもう動揺しまい（或は）「一字缺」しまい。今後は決して（如何なる事情があらうとも決して）彼女を見まい、彼女に會ふまい、彼女に話しなり云ひ聞きなりをしまい——生きる限り、今から、いかなる會見もしまい。」

七〇年七月十五日

「彼れの感情その他は、彼れの愛欲、友情などが酬ひられようとも、酬ひられまいとも、それに關係なく彼れの中に完い。」

自然に於ける完全な樹や花のやうに、彼れは生長し彼れは花咲く。——それが讚嘆の眼で眺められようと、全く人知れぬ荒野や森林の中にあらうとも。

彼れの同體である大地はそれ自身の中に完全で、隠れたる目的に對して生命と力と

を溢發する生長の凡ての過程を包有してゐる」

「愛着的な性情を押へつけろ」

「それは多すぎる——命をさいなむばかりだ」

「この病的な、熱烈な、均り合ひのとれぬ愛着性といふ奴め」

私はこれらの言葉に附加する必要を見ない。

唯忠實な彼れの研究者なるエモリー・ホロウエー (Emory Holloway) のホキットマンの戀愛關係に對する意見を附加しておく。

「『これらから私の考へるところによれば、ホキットマンは夫婦關係を結ぶのは彼れに幸するものだと考へ得なかつた程、彼れの自由を愛してゐた。若し彼れが苟も結婚してゐたら彼れに取つての大きな誤謬であつたらう。彼れは屢私に云つて聞かせた、彼れは妻を持つ人々を羨みはしないが、その子供達のあるのを羨むと云々』(オ・

コンナー夫人の言葉

このホキットマンの信據するに足る戀愛の事實から讀者は次ぎのことを注意するに難くあるまい。それは彼れがその情人として既婚の女性を選んでゐるといふことだ。かゝる婦人又はかゝる婦人の幾人かによつて彼が子供を擧げたとするなら、彼れがサイモンズになした告白の謎のやうな言葉が明瞭になつて来る。それはかういふことだ。この悲劇的な三角關係の當事者達は、事件にかゝはりのない子供の法律上、社會上、及び財産上の利益の爲めに、彼等自身の個人的感情を犠牲にして、事件を秘密に葬ることに一致したらうといふことだ」

彼れの女性に對する態度がこのやうであつたとすると、それは從來の結婚制度、家族制度に對する由々しい威脅だといはなければならない。さりながらそれは從來支持された制度に對する威脅であるが故に惡であり得ねばならぬか。これは問題である。その解決の將來に残さるべき重い問題である。男と女と子供とが結婚といふ重荷から解放される時のやがて到來するのを私は豫感せずにはゐられない。而して私としては要求せずにはゐられない。この要求には何かの機會に於て更らにいひ及ぶことがあるだらうと思ふ。

ホキットマンが潜らねばならなかつた内外の大きな事件殊にその悲戀は、彼れにとつての優れた多數の詩の母胎をなした。一八六四より一八七〇前後の諸作を讀むものは、その中に醸された豊醇な詩味に打たれずにはゐられまい。彼れの價値は段々認められ始めて國內にも英國にも多くの才能ある契合者を見出すに至つたけれども、彼れは底深い孤獨の寂寥の中にあつたのだ。

五十四歳の時正月に局部的な中風症を發し遺書を作製したといはれてゐる。この永久に若い詩人にもあの物淋しい晩夏の風がしめやかに吹きはじめたのだ。彼れは自分

の職務を捨て、ワシントンの胸友達と袂を別つて北方の海岸に轉地すべく旅程にのぼつたが、フレデルフィヤで病が急に重つたので、そのまゝ弟の住んでゐるカムデンに行つてその家に身をおいだ。その當時のカムデンは無力なものや、嫌はれものや、隠棲者が隠れにゆくやうな小さな町だつた。

貧と病と老境とが彼れに迫つた。然し大きな彼れの心は靜かに雄々しくそれ等を受け取つて震へなかつた。以前から彼れの詩を讀んで天啓の如く傾倒してゐたアン・ギルクリスト女史は、彼れの淋しい孤獨の生活を知つて英國から移住して來て結婚したいと申出たけれども彼れはそれをも靜かに拒んだ。彼れはその唯一の所有なる自由を固く擁護したのだ。彼れの自由は年を経るに従つて益光輝を増した。それは段々神々しい自然さを附加して來た。彼れはその同體なる大地の方へと近附いて行つた。而してそこから、一層深いところからその力は湧きはじめた。清澄な、大きな、凡てのもの

を暖かくじつと包みこむやうな力が彼れに光暈を加へた。「コロンバスの祈禱」「宇宙的」といふやうな詩は五十五の時の所産だ。心から彼れを慰めるものも亦彼れの周圍に集つた。ギルクリスト女史は遂にフレデルフィヤに居を構へて、彼れの時々々の訪問に氣持ちのよい團樂を提供し、テインパー・クリークなるスタッフォード家も亦彼れの爲めに門の戸を喜んで開いた。而して、それらにも増して彼れを惹きつけたものはその幼なじみの自然だつた。トラウベルとの談話に於て、彼れは絶えず自然からの交渉を綿密に告白してゐる。

彼れが六十三の時、彼れの詩の最初の承認者であり、同時に兄の如き友であつたエマソンが死んだ。

「美しい男、自分自身の上に立脚し、凡てを愛し、凡てを抱擁し、而して太陽の如く健かで朗らかだ」

と彼れはその友を回想してゐるが、それはそのまま、彼れの肖像畫であらねばならぬ。

六十五の時、この稀大のローファーも自分の巢をミックル街に構へた。而して一八七三年、彼れが七十三の三月廿六日、微雨の午後に靜かな死を死んだ。

私はこの短かい彼れの小傳を書きながら考へてゐる。私の眼の前には、ゆるんだ輪廓の、微笑を絶たない、放牧時代の父長じみた大きな一人の男がアキンボをして見下ろしてゐる。私は彼れに見下ろされることによつて何んの怖れも感じない。却て或る心強さを感じる。彼れは十九世紀に生きてゐた亞米利加人だ。然しながら二十世紀の日本の私の机の前に立つのを見ても彼れは全然不似合ではない。悠久な人類の生活の間に一人の彼れが現はれたといふのはいゝ。全然彼れの現はれ出ないのを考へるのはやはり私を淋しくさせる。私は彼れが「草の葉」の第一版を世に問ふた頃と覺はしい肖像畫が好きだ。軟かい縁廣の帽子をやゝ斜めにかしげて、その庇の蔭にその眼は少し細められ

てゐる——それは彼れの眼に觸れるものゝ角々しさを削り取らうとするやうに。その眼は大きくはない。然し美しい曲線を以て、小さな澄んだ池があるやうに皮膚によつて圍まれてゐる。その鼻の線は豊かで力強い。偏固さをすら語つてゐないではない。口は短い鬚と楔形の髯とで圍まれてゐる。この口こそは彼れを異教徒にするものに相違ない。それはさして大きくはないが見れば見る程肉感的だ。一味の淫らささへ持つてゐる。これが彼れの顔を卑俗にすると同時に抵抗し難く親しみ易くする。その喉は堅固で形よい。それが男らしい肉付きの肩にすはりよく乗つてゐる。雪白のシャツの胸をはたげて軽くアキンボをして立つてゐる。(さうだ、彼れだ、今筆執りつゝある私の前に立つてゐるのは)。何といつてもそれは無類に見事な一つの男の典型だ。いつでも靜かに、いつでも深く、見えをしないで、凡てを受け入れながら嘗て自分を失はず、一步一步大地を踏みしめて、この大男は自然に老いながら大道を遙か遠く旅してゆく。

完きを一人の人に期するところから錯誤は生ずる。彼れの弱點を見出すことは極めて容易なことだ。何故なら彼れ位自分の弱點について無頓着な男はなかつたから。彼れの詩が缺點に満ちてゐるといつたところが、恐らく彼れは喜んでうなづくだらう。然し彼れがなし遂げた出發點をつくるにあたつて、彼れ以下の缺點ですまし得る人が何人あるかを考へて見ようではないか。彼れは凡ての詩人がしたやうに、極めて單純なバラードの形式に於て作詩し始めた。それから彼れは怯づくとスタンザを用ゆる長詩へと乗り出した。然しその韻律はトライメーター及びテトラメーターのアイアンピック形式を出でなかつた。然し彼れは更らに進んだ。韻律を全く捨てはしなかつたけれども無韻詩の方へと進んで行つた。彼れはそれらの仕事に於て漸次自由な力を振ふに至つた。その時代の彼れの詩の或るもの、如きは、ビクトリヤ詩宗の誰れに比してもさして遜色のないものといふことが出来るだらう。けれども彼れは更らに一歩進み

出た。而して彼れに特有な主題を自家案出の不規則な形に於て表現しようと思つた。それは然し失敗に近い結果を招かねばやまなかつた。彼れの内部の生活が明らかに彼れ自身を生み出してはゐなかつたから。そこに彼れの詩の混亂時代があつた。その詩は寒く形式に整つて内容に亂れたり、内容に熟して形式に敗れたりした。而かも彼れは徐ろに然し絶間なくそれを鍊へに鍊へた。在來の表現の凡ての形式から退かねばならぬことを餘儀なくされた。何故なら彼れの不斷の鍛鍊によつて、彼れの特異な個性が全く特異な表現を必要にするに至つたから。彼れの態度は定まつた。その態度に特有のリズムが生じて來た。彼れの感情を存分にいひ現はすべき行の長さが生じて來た。それは大地から草木が生ずるやうに自然に彼れの個性から生じて來た。かくて新たなる世界は新たなる一つの詩を持つに至つたのだ。而してかゝる表現を餘儀なくした彼れの個性が暗らい生活の醸造槽の中で、如何に調合せられ如何に醱酵したかを思

彼れの弱所と缺點とを指摘するのは可能でまた當然せらるべきことだ。然しながらその詩形が詩人の好奇心から生れ出たといふ人があるなら、その人は人間の生活に潜んで働いてゐるリズムを感知し得ない無能力者だといふ外はあるまい。

彼れはローファーであつた。彼れの律法は彼れの中にあつた。環境からは彼れの生活を以て切り取つたそのものゝ外に彼れの頼むものはなかつた。従つて彼れは外界の規約と制度とに對して價値を否定しないとしても、極微な價値より許さなかつた。定理定説は彼れに取つては死物に等しかつた。幼児の如き素朴さを以て、彼れは憚らず自分の要求を公言する。世慣れた人々の耳にはその聲は餘り時と所とを辨へない叫喚の如く聞こえたらう。然しその聲の中に震動しつゝある感情の力は、遂には頑なな心をも動かすと私は思つてゐる。彼れは生れたまゝに育つ、育つたまゝに老い、老いたま

まに死んだ。

彼れはいつでも現在に生きた。餘りに現在に生きた。現在の凡てを易々と受け入れた。それ故に人は彼れの生涯を以て堆積はあつても成長のない生涯だつたといふ。或はさうかも知れない。彼れは徹底的に現在に始終したが故に、それを批判すべき準繩を持たなかつたやうに見える。時代の不滿に注意してゐないではなかつた。然し彼れは主義の人があるやうに、それに對して執拗な執着の態度に出でなかつたが故に、時代の不合理の一つをだに實際に提唱し矯正するところが無かつたともいへる。

けれどもそれを成就し得る人は自ら別に存するだらう。彼れはもつと素朴な信賴的な態度を以て人間に向つたやうに見える。唯彼れは凡てのローファーがさうであるやうに、自分自身をば決して曖昧なところにをくことはしなかつた。然りく否々は常に彼れの自然の發露だつた。自分の享有せんとする自由を必ず他に許すことを忘れな

かつた。

彼れはかくて先行者を有せず、従つて追隨者を退けた。彼れの追隨者たらんとするものは、その瞬間に彼れを見失つたであらう。彼れは自由の中に住む人間の可能性がどこまで行き得るかを彼れ自身に於て表現したのだ。

然しもう私は彼れを離れて行かう。彼れの時代には彼れがなければならなかつた。而して今の時代には、それにふさはしい詩人が要求されてゐる。人は常に生きつゝ常に死につゝあらねばならぬ。而して常に死につゝ常に生きつゝあらねばならぬ。

彼れをして彼れの道を行かしめよ。それを妨げるな。私達は私達の道を行かう。彼れをしてそれを妨げしめるな。

この一文の讀者は私の著作集第四輯の「叛逆者」と聚英閣發行の「新社會への諸

思想」とを併讀されんことを希望する。この二文に掲げた以外を私は成るべくこの一文の中に取り入れたつもりだから。而してこの文と他の文との間に事實の相違を發見されたら、この文に於て他のものにある誤謬が訂正されてゐると考へていただきたい。……筆者

大正十二年二月五日印刷

大正十二年二月十三日發行

大正十二年二月十五日發行於海軍

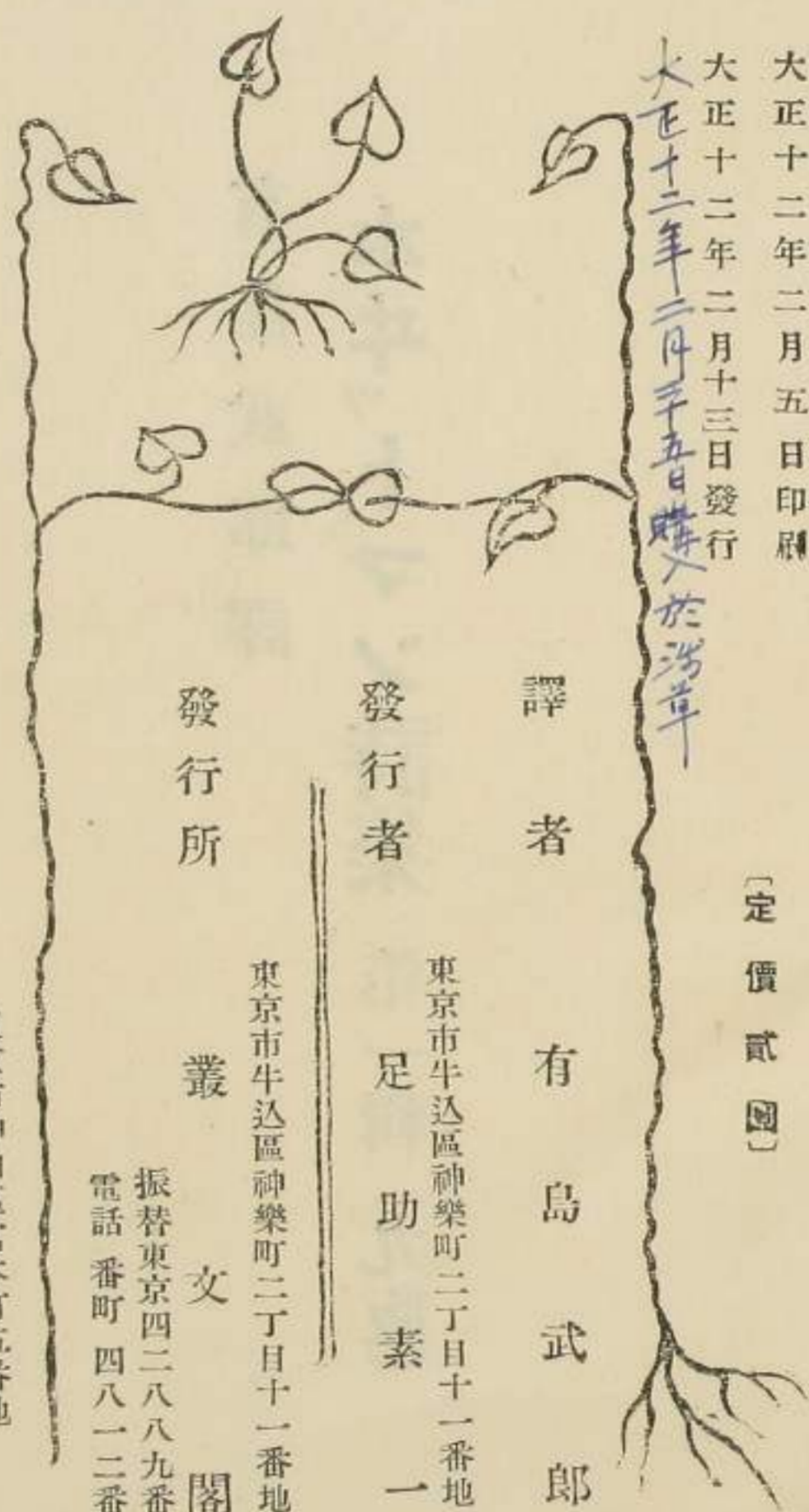
〔定價貳圓〕

譯者 有島武郎

發行者 足助素一
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

發行所 叢文閣
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
振替東京四二八八九番
電話番町四八一二番

印刷所 (印刷人) 中正社
東京市神田區宮本町五番地
高橋治一



有島武郎譯

ホヰットマン詩集 第一輯 (九版)



A

Calamus adpressus Bl.
to
"scented herbage
of my breast"
W. W.